

—フランス語の冠詞のしくみと機能—

東郷雄二

1. はじめに

(1) 冠詞の用法は、英語独特の世界観による物事への見方、捉え方を示し、英語のロジックと深く関係している。そのため、冠詞用法の正しい理解は、英語そのものへの理解につながり、まことに英語の世界観への扉を開く。

(グレン・パケット『科学論文の英語用法百科 第2編 冠詞用法』京都大学学術出版会、2016)

→ パケットの本の冒頭にエピグラフとして掲げられている上の文章は、「英語」を「フランス語」に入れ替えても成り立つ。英語以上に、冠詞はフランス語独特の世界観への扉を開く鍵であると言える。それはなぜだろうか。

(2) 冠詞の使い方はなぜ難しいか

長年フランス語を学んでいる人にとっても冠詞の使い方は難しい。フランス人に文章をチェックしてもらおうとき、いちばんよく直されるのは冠詞である。

日本語は冠詞のない言語なので、日本語を話す人には冠詞がなぜ必要なのかわからない。The Beatles, The Rolling Stones は、日本では定冠詞を省略して「ビートルズ」「ローリング・ストーンズ」と呼ばれている。しかし英語で冠詞なしで Beatles と言うと、それは「何匹かのカブトムシ」か「カブトムシというもの」(総称)という意味であり、決してあの有名なロックバンドを指すことはない。英語でロックバンドを指すためには定冠詞が不可欠である。このように冠詞のはたらきには「指示」(référence)の問題が深く関わっている。

(3) 冠詞は限定詞 (déterminant) の一種である

冠詞は名詞に付く限定詞の一種である。限定詞には次のようなものがある。

- a. 冠詞 : *un livre, la lune, du vin, etc.*
- b. 所有形容詞 : *ma voiture, votre père, etc.*
- c. 指示形容詞 : *ce matin, ces pommes, etc.*
- d. 数詞 : *trois ans, une dizaine d'étudiants, etc.*
- e. 数詞+類別詞 : *une feuille de papier, un morceau de sucre, etc.*
- f. 数詞+単位 : *un kilo de pommes de terre, deux litres d'essence, etc.*
- g. 数量表現 : *beaucoup de maisons, peu d'espoir, etc.*

限定詞は次のように定義されることがある。

On appelle « déterminant » un élément dont la présence à la gauche d'un nom commun est obligatoire en français pour que le GN (=groupe nominal) soit bien formé dans le cadre de la phrase.

(Gary-Prieur, Marie-Noëlle, *Les déterminants du français*, Éditions Ophrys, 2011)

限定詞とは、フランス語の文中で名詞句として成り立つために、普通名詞の頭に付けなくてはならない要素である。

しかしこの定義は限定詞の分布(文の中でどこに現れるか)を述べたものに過ぎず、そのはたらきに触れていない。しかしこの定義から少なくとも、フランス語では名詞

の頭に何かを付けないと使うことができないということがわかる。限定詞とはその名のごとく「限定する」(déterminer) はたらきを持つ語群である。

(4) 限定する (déterminer) とは何か

「限定する」とは名詞の持つ意味を狭めることを言う。fleur「花」という名詞は、この世にあるどんな花でも指すことができ、あまりに漠然としている。fleurと言われなくても、聞き手はどんな花を思い浮かべればいかわからない。しかし fleur rouge「赤い花」と言えば、色が限定されて候補が絞られる。さらに deux fleurs rouges「2輪の赤い花」と言えば、数も限定されてさらにイメージがはっきりする。les deux fleurs rouges que j'ai achetées hier「私が昨日買った2輪の赤い花」というとさらに意味が限定されて、特定の花を指すようになる。形容詞 rouge も数詞 deux も関係節 que j'ai achetées hier も名詞の意味を狭めているので、いずれも限定のはたらきをしている。

しかし、形容詞や数詞や関係節はいつも名詞に付けなくてはならないわけではない。限定詞の中では、冠詞・所有形容詞・指示形容詞が互いに排他的関係にあり、いずれかが必須である。排他的関係というのは、*le mon livre, *cette la chaise のように重ねて使うことができず、どれかひとつにしなくてはならないということである。(les deux fleurs「その2輪の花」、mes trois enfants「私の3人の子供」のように、定冠詞と数詞、所有形容詞と数詞は共起できる)。ここから冠詞・所有形容詞・指示形容詞は限定詞の中でも特別なものであることがわかる。

所有形容詞は所有者との関係で名詞を限定し、指示形容詞は指差しなどを伴って直示により名詞を限定する。ところが冠詞はそのような補助的な要素なしに名詞を限定することに特化した言語記号である。その意味で冠詞は限定詞の中の限定詞(déterminant par excellence) と言える。

(5) 消された冠詞は復元できるか

任意のフランス語の文章の冠詞をすべて塗りつぶして、フランス語母語話者に冠詞を復元するよう頼むとする。するとそのフランス語母語話者は元の冠詞を復元できるだろうか。それともできないだろうか。

《問題例》前置詞 de や que のエリジョンや縮約はせずそのままにしてある。

(1) ignorance est (2) condition nécessaire, je ne dis pas de (3) bonheur, mais de (4) existence même. Si nous savions tout, nous ne pourrions pas supporter (5) vie une heure. (6) sentiments qui nous la rendent ou douce, ou du moins tolérable, naissent de (7) mensonge et se nourrissent de (8) illusions. Si possédant, comme Dieu (9) vérité, (10) homme la laissait tomber de ses mains, (11) monde en serait anéanti sur (12) coup et (13) univers se dissiperait aussitôt comme (14) ombre. (15) vérité divine, ainsi que (16) jugement dernier, le réduirait en poudre.

(Anatole France, *Le Jardin d'Epicure*)

無知は、幸福のとは言わないまでも、人生そのものの必要条件である。私たちがもしすべてを知っていたら、人生を1時間と耐えることができないだろう。人生を和らげてくれたり、少なくとも我慢できるものにしてくれる感情は、嘘から生まれ幻想を糧とする。神のように真実を知る人間が、それを不用意に手から落とそうものならば、世界はただちに消滅し、宇宙は影のように雲散霧消することだろう。神聖なる真理は、最後の審判と同様に、宇宙を粉々にしてしまうことだろう。

《答》 1. L' 2. la 3. du 4. l' 5. la 6. Les 7. un 8. なし 9. la 10. un 11. le
12. le 13. l' 14. une 15. la 16. un

(6) 消された冠詞は完全に復元することはできない。

その理由は、もし冠詞を完全に復元することができたならば、冠詞には何の機能もないということになるからである。言語記号の意味は選択によって生まれる。

ある言語記号が機能を持っているかどうかは、その記号の有無（もしくは記号の種類の違い）によって、意味が区別されるかどうかで決まる。これが Saussure の言う「言語の意味は差異 (différence) である」という原理である。

【例 1】長音と短音の区別

日本語や英語には長音と短音の音韻論的対立があり、意味を区別する機能を持つ。

泥 [doro]～道路 [do : ro]、時 [toki]～陶器 [to : ki]

sit [sít]～seat [sí : t]、bit [bít]～beat [bí : t]

フランス語には長音と短音の音韻論的対立がなく、母音の長短は弁別的機能を持たない。Seine「セーヌ川」を[sɛn]と発音しても[sɛ : n]と発音しても同じである。また rose [ro : z]のように、-z の前で [o] は長母音化するように、選択の余地がない。

【例 2】帯気音 (aspiration)

英語では無声子音の[p] [t] [k]で始まる強勢のある音節で自動的に帯気音が出るので、音韻論的機能を持たない。帯気音は意味の区別に役立っていない。

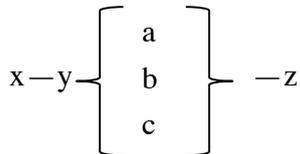
park [p^há : k] tea [t^hí :] keep [k^hí : p]

中国語では有気音と無気音は音韻論的対立を持ち、意味を区別する機能を持つ。

踏 tà [t^ha] 大 dà [ta]

(5) 範列関係 (paradigme) と機能

同一の統語的環境（単語のなかの位置）において、複数の要素 {a, b, c, ...} を入れ替えることができるとき、それらの要素は範列関係を成すという。



言語において意味を生むのは差異である。範列関係に置かれた差異が意味を生む。同一の統語的環境において範列関係が成り立たなければ意味は生じない。

(6) 冠詞は範列関係に立つ

たとえば J'ai mangé () pain. という統語的環境で、カッコに入る冠詞はひとつに決まらない。

a. Au petit déjeuner, j'ai mangé *du* pain avec du beurre et de la confiture.

朝食に私はバターとジャム付きのパンを食べた。

b. Il y avait un morceau de pain et une tranche de jambon sur la table. J'ai mangé *le* pain, mais je n'ai pas touché le jambon.

食卓にひと切れのパンとハムが一枚あった。私はパンは食べたが、ハムには手をつけなかった。

c. J'ai trouvé un gros morceau de pain. J'ai mangé *de ce* pain.

私は大きなパンの塊を見つけた。私はそのパンを少し食べた。

この例では { du / le / de ce } が範列関係をなす。冠詞のちがいは意味のちがいに対応している。話し手・書き手がどの冠詞を用いるかは、話し手・書き手が何を表現したかという表現意図によって決まる。他人の頭の中で起きていることは、その人以外にはわからない。だから消された冠詞を復元することはできないのである。

2. 冠詞はどんな働きをしているか

辞書の見出し語には冠詞が付いていない。見出し語は **chien** のように裸の単語である。これはなぜだろうか。このことを理解するためには、「内包」と「外延」という意味論の基礎的概念を理解する必要がある。

(1) 内包 (intension / compréhension)

かんたんに言えば内包とは「単語の意味」である。たとえば『新明解国語辞典』（三省堂）で「鯛」を引くと、「深い海にすむ中形の硬骨魚。からだは平たくてさくら色。種類が多く、マダイは味がよく、めでたい時に使う」とある。難しく言うと、内包は「意味素性」(traits sémantiques) の束とされる。

(2) 外延 (extension)

外延とはその語の内包が当てはまる個体の集合である。たとえば「関西学院大学の学生」とは関西学院大学に所属する学生の集合である。内包と外延は反比例の関係にある。「関西学院大学の学生で大阪出身の人」のように内包を増やすと外延は狭まる。外延は「私の父」「この車」のように、ただひとつの要素 (singleton) からなる集合であることもある。

(3) 辞書とは単語の意味を説明するものであり、辞書の見出し語は内包しか持っていない。このため辞書の見出し語の **chien** はこの世のどんな犬も指す潜在的な可能性がある。しかし内包は言わば「絵に描いた餅」であり、食べることができない。「絵に描いた餅」を食べられる餅に変えるには、**chien** という単語を現実存在する犬、あるいは想像で生み出した犬を指せるようにしなくてはならない。この操作を「現働化」(actualisation) という。この考え方の基礎にはソシュールが提唱した **langue / parole** の区別がある。

(4) langue / parole

L'opposition *langue* vs. *parole* est l'opposition fondamentale établie par F. de Saussure. Le langage, qui est une propriété commune à tous les hommes, et qui relève de leur faculté de symboliser, présente deux composantes : la langue et la parole. (...) Dans cette théorie la *langue* est un *produit social*, tandis que la parole est définie comme la « composante individuelle du langage », comme « un acte de volonté et d'intelligence ». La langue est un produit social en ce sens que « l'individu l'enregistre passivement » ; cette partie sociale du langage est « extérieur à l'individu », qui ne peut ni la créer ni la modifier. (...) Ainsi, la langue est la partie du langage qui existe dans la conscience de tous les membres de la communauté linguistique, la somme des empreintes déposées par la pratique sociale d'innombrables actes de parole concrets.

(Jean Dubois et als, *Dictionnaire de linguistique*, Larousse, 1973)

ラング（言語体系）とパロール（話）の区別は、ソシュールによって立てられた重要な区別である。ランゲージュ（言語行為）はすべての人間に共通な能力で、人間の持つ象徴化の能力に基づいているが、そこには2つの部分を区別できる。ラング（言語体系）とパロール（話）である。（…）この理論では、ラング（言語体系）は社会的産物であり、一方パロール（話）

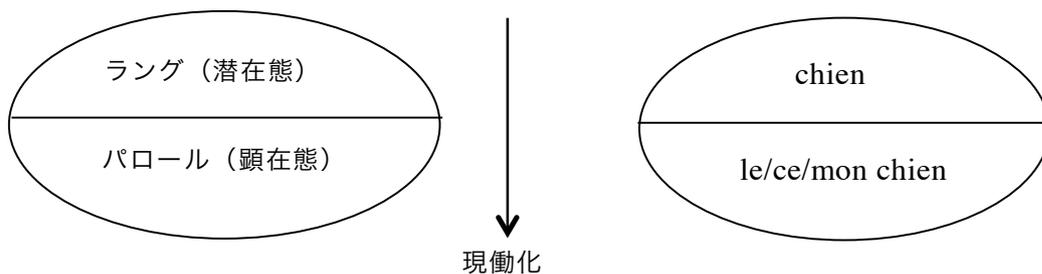
は「ランゲージュ（言語行為）のうちの個人的部分」と定義される。それは「個人の意思と知性」によるものである。ラング（言語体系）が社会的産物であるというのは、「個人が受動的に受け取る」からである。ランゲージュ（言語行為）の一部であるラング（言語体系）は「個人の外にある」ために、個人はそれを創り出すことも変更することもできない。（…）このようにラング（言語体系）はランゲージュ（言語行為）のうちで、言語共同体の成員すべての意識の内に存在するものである。それは無数の具体的なパロール（話）の積み重ねという社会的実践によって、人々の意識の中に蓄積された刻印の総和である。

【解説】

かんたんにまとめると、ラング（言語体系）とは、みんなが頭の中に持っている文法と語彙の集合である。生まれたばかりの赤ん坊は話すことができないが、成長するにつれて親や周囲の人が話す言葉を習得する。その習得は受動的であり、言葉は親から受け取るものである。文法と語彙は個々人の頭の中に蓄えられているものだが、それは社会的なものでもある。言語共同体の共有財産であり、個人の恣意によって勝手に変えられるものではない。明日から *chien* の意味は「ネコ」にしようなどとできるものではない。この意味でラング（言語体系）は「個人の外」にあるものである。一方で、私たちは頭の中のラング（言語体系）に蓄えられた文法知識と語彙を用いて、一回ごとの発話をする。それがパロール（話）である。ソシュールは言語学の研究対象はラング（言語体系）であるとした。これによって近代的な理論言語学が始まったのである。その反面、パロール（話）は研究対象とされなくなった。

(5) 潜在態と顕在態

ラング（言語体系）は言語共同体に属する個人の頭の中に蓄えられているもので、発動されない限り（=ずっと黙っていると）表に現れることはない。この意味でラング（言語体系）は潜在態 (*le potentiel*) の状態にある。私たちはラング（言語体系）を発動させて一回一回の発話であるパロール（話）を産出する。パロール（話）は表に現れたものであり、顕在態 (*l'actuel*) である。潜在態である言語知識を顕在態である一回ごとの発話に変える操作を**現働化**(*actualisation*) と呼ぶ。



(6) 現働化 (*actualisation*) はスイスの言語学者シャルル・バイイが提唱した。

Pour devenir un terme de la phrase, un concept doit être actualisé. Actualiser un concept, c'est l'identifier à une représentation *réelle* du sujet parlant. En effet, un concept est en lui-même une pure création de l'esprit, il est virtuel ; il exprime l'idée d'un genre (chose, procès ou qualité). Or, la réalité ignore les genres ; elle n'offre que des entités individuelles.

Le concept virtuel est indéterminé en extension ; il est impossible de penser que la notion de *fleur* comprenne un nombre fixe de choses appelées « fleur », la notion de *marcher* un nombre fixe d'actes de marche, ou que *rouge* désigne un nombre déterminé de nuances de

cette couleur. Inversement, le concept est déterminé en compréhension ; tout concept, (...) est toujours déterminé par un nombre limité de caractères distinctifs. (...) Tout ce qui est pensé comme *réel* est conçu comme déterminé, ou tout au moins comme déterminable, en quantité, même lorsque cette quantité est impossible à vérifier. Si j'entends aboyer *des chiens*, je puis ignorer leur nombre, mais il ne me viendrait pas à l'idée d'imaginer qu'ils peuvent être indifféremment quatre, cinq ou six. (...) De même, l'expression « Donnez-moi *du pain* » suppose toujours une portion mesurable de la substance en question. (...) L'actualisation des concepts consiste donc à les faire passer dans la réalité ; rappelons que cette réalité peut être non seulement objective, mais aussi idéale et imaginaire.

(Bally, Charles, *Linguistique générale et linguistique française*, Francke, 1932)

具体的な文の要素となるためには、概念は現働化されなくてはならない。概念を現働化するとは、話し手にとっての「現実」の表現と合致させることである。実際のところ、概念とはそれ自体頭が作りだしたものであり、潜在態である。概念は類の観念を表している（事物、出来事、質）。しかしながら現実には類は存在しない。現実にあるのは個々の事物だけである。

潜在態である概念は外延に関しては限定されていない。「花」という概念が、花と呼ばれる個体を一定の数含んでいるなどと考えることはできない。同様に「歩く」という概念が一定数の歩く行為を含んでいるとか、「赤い」という概念が一定数の赤の色調を含むと考えることはできない。逆に概念は内包に関しては限定されている。あらゆる概念は (...) 有限の示差的特徴によって限定されている。(…) 現実と見なされるものはすべてその量に関して、たとえその量を実際に確かめることができなくても限定されているか、もしくは限定することが可能である。私が犬が吠えているのを聞くとする。私には実際の犬の数はわからないが、犬が同時に 4 頭でも 5 頭でも 6 頭でもあるなどとは考えることができない。(…) 同じように「パンをください」というときは、常にある一定量のパンが問題となっているのである。(…) 概念の現働化とはこのように概念を現実の領域に移行させることである。この現実とは、客観的な現実だけではなく、頭で考え出した想像上のものでもかまわないことはすでに述べたところである。

【解説】

ここで説明されているように、名詞について言うと、現働化とは内包しか持たない単語 *fleur* を現実のまたは想像上の「この花」や「昨日もらった花」を指すことができるようにする操作である。それは内包に外延を与えることに他ならない。

Les fleurs qu'on m'a données hier sont déjà fanées.

昨日もらった花はもうしおれてしまった。

上の解説で「概念は類を表している」という点にも注意が必要である。「犬」 *chien* という概念は動物種としての類 (*genre*) を表している。だから犬が道を歩いているということはない。歩いているのは「犬」という類に属する個体である。「シェパード」 *berger allemand* も概念であるので、シェパードが道を歩くこともない。歩いているのはシェパードという下位類に属するお隣のポチという個体である。

現働化された名詞はその数や量が限定されている。たとえば *Il y a des enfants qui jouent dans le jardin.* 「庭で子供たちが遊んでいる」と言うとき、*des enfants* の数はわからなくても一定の数であることは明らかである。*Il a bu du jeu d'orange.* 「彼はオレンジジュースを飲んだ」と言うと、彼が飲んだジュースの量は確定している。

バイイは続けて現働化を受けた概念は空間的に定位されるとも述べている。

Un concept de chose (p. ex. maison) appliqué sur un objet réel (la maison que je vois, cette maison) se trouve localisé dans une portion de l'espace réel, en tant qu'il occupe une

position déterminée par rapport à celle du sujet parlant. (Ibid.)

ものごとの概念 (ex.家) が現実のもの (私に見えている家、この家) に当てはめられると、概念は現実の空間の一部に定位される。概念は話し手の位置と相対的にある特定の位置を占めるのである。

この現働化に伴う空間的定位もまた重要な概念である (後で現働化における文の述語の役割について論じるときに触れる)。ただし例外は総称文である。総称文では主語名詞句は類 (genre) を表し、また空間的に定位されることもない。従って、総称文では名詞に冠詞は付いているが、実質的に現働化されていないと見ることもできる。

Les castors construisent des barrages. ビーバーはダムを作る。

(7) 辞書の見出し語が *chien* のように冠詞が付いていないのは、見出し語が内包しか持たない潜在態の状態にあり、外延を持たないからである。裸の名詞に外延を与えるのは限定詞や形容詞・関係節などの修飾表現である。限定詞の中でも現働化に特化したのが冠詞である。したがって冠詞の役割は名詞を現働化し外延を与えるとまとめることができる。平たく言うと、名詞は冠詞がついてはじめて何かを指すことができるようになるのである。

ただし、名詞に冠詞を付けた *un chien* だけでは外延を与えることにはならないことにも注意しよう。*un chien* は次の例のように文の中に入れて断定 (assertion) を受けなくてはならない。

a. *Un chien a mordu Pierre.* 犬がピエールを噛んだ。

b. *Elle va adopter un chien abandonné.* 彼女は捨て犬を引き取ることになっている。
疑問文のように断定がない文では *un chien* は外延を持たない。

c. *Avez-vous un chien ?* あなたは犬を飼っていますか。

否定文は断定されているが、名詞句は外延を持たない。その存在が否定されているからである。

d. *Il n'a pas un ami.* 彼には友人が一人もいない。
比喩でも名詞句は外延を持たない。

e. *Il est muet comme une carpe.* 彼は鯉のように無口だ。
反実仮想の文では、名詞句は仮定された可能世界においてのみ外延を持つ。

f. *Si j'avais une voiture, je pourrais aller au travail plus facilement.*

もし車があったもっとかんたんに仕事場に行けるのに。

(8) 辞書の見出し語では動詞は不定形である (ex. *marcher*)。その理由は不定形の動詞は概念を表し、内包しか持たない潜在態だからである。動詞の外延は出来事 (procès) である。動詞が出来事を表すには、動詞を活用させて人称・数・法・時制を与えなくてはならない。

a. *J'ai marché longtemps sous la pluie.* 私は長時間雨の中を歩いた。

このなかで特に重要なのは法と時制である。したがって不定形の動詞を現働化するのは法と時制であると言ってよい。

(10) ここから冠詞などの限定詞と時制のあいだには平行性があるという主張が生まれる。たとえば次のような対応関係を考える人もいる (cf. de Mulder)。

限定詞	時制
不定冠詞・ 部分冠詞	単純過去形（新しいもの・出来事を導入する）
定冠詞	半過去形（既に導入済みのもので、出来事を引き継ぐ）
指示詞 <i>ce</i>	複合過去形（話し手との関係でもの・出来事を導入する）

3. フランス語の冠詞体系

(1) 文法書では、フランス語の冠詞には不定冠詞・定冠詞・部分冠詞の 3 種類があるとされることが多い。

a. 不定冠詞 (article indéfini)

	単数	複数
男性	un	des
女性	une	

b. 定冠詞 (article défini)

	単数	複数
男性	le	les
女性	la	

c. 部分冠詞 (article partitif)

男性	du
女性	de la

しかしこの分類は誤解を招くので好ましくない。変更すべきである。

よく知られているように、不定冠詞は可算名詞 (nom comptable) に、部分冠詞は非可算名詞 (nom non comptable) に用いられる。

d. J'ai acheté *un* livre. (可算名詞)

私は本を買った。

e. J'ai acheté *de l'eau* minérale. (非可算名詞)

私はミネラル・ウォーターを買った。

このように不定冠詞と部分冠詞は相補分布 (distribution complémentaire) をなしている。構造主義言語学では相補分布をなす記号は同じひとつの記号と見なす。したがって不定冠詞と部分冠詞は同じものである。部分冠詞と呼ばれているものは、非可算名詞用の不定冠詞に他ならない。したがって次のように分類を改めるべきである。

		不定		定	
		単数	複数	単数	複数
可算	男性	un	des	le	les
	女性	une		la	
非可算	男性	du		le	
	女性	de la		la	

(2) フランス語の冠詞を上のようにまとめてもいくつか疑問が残る。

- ① **du** は前置詞 **de+le** の縮約形、**de la** は前置詞 **de+la**、**des** は前置詞 **de+les** の縮約形と形が同じである。これは偶然なのだろうか。
- ② 可算の不定単数 **un / une** と複数 **des** は語形がまったくちがう。一方、可算複数の **des** と非可算の **du / de la** は語形が似ている。これはなぜだろうか。
- ③ 不定の欄では可算名詞用と非可算名詞用は異なる冠詞を用意してあるが、定の欄では可算にも非可算にも同じ冠詞を用いる。これはなぜだろうか。

このうち①と②の疑問には部分冠詞の歴史的な成り立ちを考える節で答えることにする。③だけはいささか性質の異なる疑問なので、ここで少し考えてみよう。

(3) 不定では可算・非可算の区別があるのに、定ではないのはなぜか

冠詞は自然言語の品詞として考えると**限定詞 (déterminant)** に分類されるが、論理学の用語では**量化詞 (quantifieur)** とされる。量化 (quantification) とは、物の数や量を指定することをいい、量化詞は数や量を表す表現を指す。次はどれも量化詞である。

- a. *Tous les villageois étaient là.* 村人は全員そこにいた。
- b. *Je connais la plupart des étudiants.* 私は学生の大半を知っている。
- c. *Il a mangé la moitié du gâteau.* 彼はケーキを半分食べた。
- d. *Quelques pages sont sales.* 何ページか汚れている。

不定冠詞はふつう初出名詞に使われる。何かについて初めて語るときには、その数や量を指定しなくてはならない。

- e. *Elle a rencontré un garçon dans le parc.*
彼女は公園で一人の男の子に出会った。
- f. *Il y avait une dizaine d'élèves dans la salle de classe.*
教室には 10 人ほど生徒がいた。
- g. *Il a bu du vin rosé / trois verres de vin rosé.*

彼はロゼワインを / 3 杯のロゼワインを飲んだ。

これにたいして定冠詞は既出名詞に使われることが多い。既出名詞では量化はすでに終わっている。e.では「一人の男の子」、f.では「10 人ほどの生徒」、g.では「(いくらかの) ロゼワイン / 3 杯のロゼワイン」と、数・量がすでに確定している。それらの事物に再び言及するとき、**le N / les N** は事物のすべてを指す。(これを包括性の原理英 *inclusiveness* という) 次の h.~j.はそれぞれ e.~g.の続きである。

h. *Le garçon jouait avec un ballon.*

男の子はボール遊びをしていた。

i. *Les élèves travaillaient silencieusement.*

生徒たちは静かに勉強していた。

j. *Le vin qu'il a bu était délicieux.*

彼が飲んだワインはとても美味だった。

定冠詞は量化が済んだ既出名詞が表す指示対象のすべてを指すので、その対象が可算か非可算かは関係がない。だから定冠詞には可算用と非可算用の区別がないのである。

N. B. 定冠詞には既出名詞を指す以外の用法があるが、その場合でもどこかで量化が済んでいるという事情は変わらないので、同じ説明が可能である。

(4) 英語の冠詞体系との比較

	不定		定	
	単数	複数	単数	複数
可算	a	∅	the	
非可算	∅			

(∅ 記号は存在しないことを表す)

英語では可算名詞の単数形にのみ不定冠詞 **a** が付く。可算名詞の複数形と非可算名詞に用いる冠詞は存在しない（弱形の **some** を使うことがあるが、これは冠詞ではなく数量詞である）

a. I bought **a** book on gardening.

私は庭作りについての本を（1冊）買った。

b. I bought **∅** books on gardening.

私は庭作りについての本を（数冊）買った。

c. I drank **∅** wine for dinner.

私は夕食にワインを飲んだ。

フランス語の冠詞体系との比較から次のことが言える。

(A) 英語は冠詞の発達が途中で止まってしまった言語である

英語も昔は冠詞を持たなかった。中期英語 (**Middle English = ME**) の時代 (1066 年から 15c まで) から徐々に冠詞を発達させてきたが、未だに未完性のままである。

(B) 不定冠詞より定冠詞の方が早く発達する

定冠詞 **the** は中期英語の早い時期から使われるようになった。一方、不定冠詞の発達はそれより遅い。定冠詞の方が早く発達するのは、定冠詞の機能と不定冠詞の機能のちがいによる。

(C) 名詞の中では可算単数が冠詞を必要とする度合いが高い。

それは指示対象の「個別化」(**individualisation**) のためである。指示対象の「個別化」とは、名詞句が指している事物の輪郭がはっきりと認識されるということである。可算複数是非可算とよく似た点があり、指示対象の輪郭がぼやけてははっきり認識されない。このため冠詞の発達が遅れたと考えられる。

- (D) 冠詞の体系が不完全なため、英語では無冠詞の名詞が多い。
- Peter drunk \emptyset wine. ピーターはワインを飲んだ。
 - Peter likes \emptyset wine. ピーターはワインが好きだ。
 - \emptyset Time is \emptyset money. 時は金なり。
 - \emptyset Japan holds more Michelin stars than any other country, but its love of \emptyset food isn't limited to \emptyset fine dining. **The** Japanese phrase “B-kyuu gurume” (B-grade gourmet) refers to \emptyset appreciation of \emptyset food in its more common forms, where \emptyset style and \emptyset pretension takes a backseat, and \emptyset flavor is everything.
日本は他のどこの国よりミシュランの星をたくさん持っている。しかし日本人の食への愛情は高級な料理以外にも及ぶのである。「B 級グルメ」という日本語の言い回しは、ふだんの日常的な食べ物への好みを意味していて、上品さや気取りは影を潜め、匂いが重んじられる。
- (E) これに対してフランス語は完全な冠詞の体系を持っているので、フランス語では無冠詞は例外的である。
- Marie a \emptyset faim. マリーはお腹が空いている。〔句動詞〕
 - Il a échoué par \emptyset paresse. 彼は怠慢のせいでしくじった。〔一部の前置詞と〕
 - \emptyset Boucherie [店の看板] 牛肉店 [看板、標識、ラベル]
 - \emptyset Garçon! [呼びかけ] ボーイさん! [呼びかけ]
 - \emptyset Pierre qui roule n'amasse pas \emptyset mousse. 転石苔むさず。〔諺〕
- (5) 日本語のように冠詞を持たない言語で名詞の限定はどのように行われているか
日本語では次のように名詞の限定を明示的に行なうこともある。
- その本を取ってください。〔指示詞その、この、あの〕
 - 私の車はこれです。〔所有形容詞〕
 - 山田君が書いた本はどれだったかな。〔連体修飾句〕
 - 鉛筆を 3 本ください。〔数詞〕
 - そこには 大勢の人がいた。〔数量表現〕
- しかし冠詞に相当する記号はないので、裸名詞の限定は文脈・状況と世界についての知識という語用論に委ねられている。
- 麻理枝は市場で トマトを買った。
→一度に買うトマトは数個に限られる。
 - 沖田は夕食にワインを飲むことにしている。
→一度に飲むワインの量も限られている。
 - 由紀子は チョコレートが好きだ。
→好き嫌いは特定のチョコレートやいくらかのチョコレートではなく、この世にあるチョコレート全体に及ぶ。
- これに対してフランス語や英語は、名詞の限定を専門に行なう冠詞を作り出して、**限定を文法の一部として組み入れた**のである。ここが日本語とちがう大きなポイントである。
- (6) フランス語の冠詞の歴史的発達
フランス語の親であるラテン語には冠詞がなかった。
- Rosa pulchra est.* バラは美しい
バラ-主格単数 美しい be 動詞-3 人称単数

b. *Rosae aquam do* 私はバラに水を与える。

バラ・与格単数 水・対格 与える・1人称単数

紀元1世紀から5世紀までの俗ラテン語 (*latin vulgaire*) の時代に冠詞は徐々に形成されていったと言われている。古フランス語 (*ancien français*) の成立は9世紀頃で、その時には一応は不定冠詞と定冠詞は出来ていた。部分冠詞の成立はもっと遅くなる。

次の表は、ラテン語のテキストを古フランス語 (1284年) と現代フランス語に訳したものの比較である。頭から登場する 2,500 の名詞句に冠詞が付いているか、付いていたらどの冠詞かを比較したもの。

冠詞	古フランス語	現代フランス語
le / les	50,4%	65,4%
un	3,2%	12%
du / des (de)	0%	4,2%
無冠詞	46,4%	18,4%

(Goyens, M., *Emergence et évolution du syntagme nominal en français*, Peter Lang, 1994, cité dans Carlier, Anne « La genèse de l'article UN », *Langue française* 130, 2001.)

これを見ると、定冠詞はかなり現代語に近い程度まで使われていたことがわかる。それにたいして、不定冠詞は現代の4分の1に留まり、部分冠詞はまったくない。名詞句の約半数が無冠詞であったことが知れる。

3.1. 不定冠詞の形成

(7) 不定冠詞の単数形は基数詞の **un** (1) から生まれた

語形から明らかのように、フランス語の不定冠詞の単数形は基数詞の **un / une** から生まれた。通言語的に見ても、不定冠詞の単数形が基数詞の1に由来する言語は多い。

英語では **one** から不定冠詞 **an** が生まれた。後に子音始まりの名詞の前では **a** が使われるようになり現在の形になった。

one book → **an** book → **a** book / **an** apple

(8) **un / une** の複数形は **des** ではなく **uns / unes** ではないのか？

スペイン語の冠詞は次のようになっている。

	単数	複数
男性	uno	unos
女性	una	unas

a. *Un homme compra unas gafas.*

un homme achète des lunettes

一人の男が眼鏡を買う。

これを見るとフランス語の不定冠詞複数形が **des** なのは奇妙に見える。

事実、古フランス語の不定冠詞の体系は次のようになっていた。

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	uns	un	une	unes
斜格	un	uns		

ただしこの時代には不定冠詞の使用は限定的である。単数形は「人」や「本」のように個別化の可能な具体名詞にしか用いられず、抽象名詞は無冠詞である。

b. *Devant ses ieus encontre li rois un bachelor*

[Le roi voit devant lui (ses yeux) un jeune homme]

王は目の前に一人の若者を見る。

c. *Car parole oïe est perdue*

S'ele n'est de cuer entendue

[Car une parole qu'on entend se perd si elle n'est pas comprise par le cœur]

というのも、人が聴く言葉はもし心で理解しないならば失われるからである

また複数形 **uns / unes** は「靴」「鋏」「眼鏡」のように対をなすもの(双数 **duel**) や、チェスのセットのような集合的な意味でしか用いられなかった。それ以外は無冠詞がふつうであった。

a. *Il a unes botes qui ont bien deux ou trois ans.*

彼は優に2年か3年ほど経た靴を履いていた。

b. *Tristan unes forces avait.*

トリスタンは鋏を持っていた。

複数形の **uns / unes** は15世紀頃まで使われていたが、その後 **des** に取って代わられた。現在では不定代名詞 **les uns ... les autres** としてのみ残っている。

c. *Aidez-vous les uns les autres.*

あなた方はお互いに助け合いなさい。

では不定冠詞の複数形はどのようにして **uns / unes** から **des** になったのだろうか。それには部分冠詞の形成が深く関わっている。

3.2. 部分冠詞の形成

(9) もともと部分冠詞は前置詞 **de** と定冠詞が縮約したものから発達した。したがって、前置詞+定冠詞の縮約形と部分冠詞が同じ形をしているのは偶然ではない。

a. **de + le** → **du**

b. **de + la** → **de la**

c. **de + les** → **des**

部分冠詞の形成には次のようなプロセスがあったと考えられている。

① 前置詞の **de** にはもともと何かの「部分」を表す用法がある。これは現代語でもそうである。朝倉文法には次のように書かれている。

懸隔の意より発展して、後続(代)名詞の示す一群、全体の部分を表す。

Est-ce que vous avez de ses nouvelles ?

彼から便りがありますか。

manger *de tous les plats*

どの料理も箸をつける (朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

② 定冠詞は既出のものを指す前方照応用法がまず発達した。それに前置詞 **de** を付けた **de + le N** → **del N** は「その N の一部」を指した。フランス語史の大家 Lucien Foulet は次のように書いている。

[il] verse an la cope d'argent

del vin qui n'était pas troublez. (Chrétien de Troyes, *Perceval*)

現代語訳 Il verse dans la coupe d'argent / de ce vin qui n'était pas troublé.

彼は銀の杯に濁っていないそのワインを少し注いだ。

Il ne s'agit pas d'un vin quelconque, mais d'un vin dont on nous a parlé, qu'on nous a montré contenu dans un 'bocel' plein. Le partitif au XII^e siècle indique une fraction indéterminée d'une quantité parfaitement déterminée. [...] Le XII^e siècle ignore les locutions *verser du vin*, *perdre du sang* au sens qu'elles ont pour nous ; « verser du vin », c'est toujours, pour les contemporains de Chrétien, verser de ce vin que nous avons sous les yeux, comme « perdre du sang » c'est perdre de ce sang qui est le sien ou le vôtre. Pour tous les cas où il s'agissait d'une fraction indéterminée d'une quantité également indéterminée, la vieille langue avait, nous le savons, un procédé parfaitement adéquate : elle employait le substantif partitif sans article ou appendice d'aucune sorte.

(Foulet, Lucien, *Petite syntaxe de l'ancien français*, Champion, 1965)

[del vin が指しているのは]どれでもよい何らかのワインではない。すでに話題になったワインであり、満たされた酒壺の中にあるワインである。12世紀の部分冠詞は、はっきりと定まった量の不特定の部分を指した。(…) 12世紀には今日のような「(不特定の) ワインを注ぐ」「(不特定の) 血を流す」という言い回しはなかった。「ワインを注ぐ」は、クレチアン・ド・トロワの時代の人にとっては、目の前にあるワインの一部を注ぐことであり、「血を流す」とはある人の、またはあなたの血を流すことであった。不特定の量のある一部を表す場合には、よく知られているように古語は極めて適切な表現法を用いていた。名詞に冠詞やそれに類似した付属語を付けずに用いたのである。

またこのような用法の « **del N** » は限られた環境でしか用いられなかった。mangier (=manger), boire (=boire), prendre のような動詞の直接目的語としてしか使われていないとされている。(したがって不定冠詞のような主格・斜格の区別はない)

③ 中期フランス語 (Moyen français) の時代になって、**Le vin est bon pour la santé**. 「ワインは健康によい」のような定冠詞の総称方法が定着した。これは France など無冠詞で使われていた国名にも定冠詞を付けるようになる変化と軌を一にしている。

その結果、次のような意味のシフトが生じたと考えられている。

mangier **del** pain 「(その) パンの一部を食べる」 (**le pain** は特定のパン)

↓

mangier **del** pain 「(一般の) パンをいくらか食べる」 (**le pain** はパン一般)

④ 同じ変化が複数形にも起きたと考えられる。

mangier **des** [=de + les] cerises 「(その) サクランボをいくつか食べる」

(**les cerises** は特定のサクランボ)

↓

mangier **des** [=de + les] cerises 「(一般の) サクランボをいくつか食べる」

(**les cerises** はサクランボ一般)

⑤ こうして **du N / de la N** は非可算名詞に付く部分冠詞として、「不特定のある量の N」を表すようになった。**des N** は可算名詞に付いて「不特定のいくつかの N」を表すようになったが、可算名詞の「不特定のひとつの N」を表すのは不定冠詞である。このため **des** は部分冠詞ではなく、不定冠詞の複数形とされるようになったのである

(10) このような歴史的経緯を反映している「部分冠詞」(*article partitif*) という名称は、「特定のあるものの不特定の一部」を表す昔の用法の名残である。現代語の **du / de la** には何かの「部分」を表すという意味はない。**boire du vin** は単に「ワインをいくらか飲む」を意味する。したがって「部分冠詞」という名称は不適切で、「非可算名詞用の不定冠詞」と改めるべきである。

(11) 上記のような形成過程を経て生まれたために、冠詞の体系の中で「部分冠詞」をどう位置づけるかについてはいまだに議論がある。

① 証言 (1)

Il y a eu, et il y a encore, beaucoup de discussions sur le statut du partitif, et même sur son existence en tant que forme spécifique. (...) De nombreuses grammaires attribuent à l'article partitif le pluriel « des ». Cela ne se justifie, à la rigueur, que pour quelques noms qui sont à la fois massifs et dépourvus de singulier (des épinards, des rillettes, des décombres).

(Gary-Prieur, Marie-Noëlle, *Les déterminants du français*, Éditions Ophrys, 2011)

かつて部分冠詞をどう捉えるかについては多くの議論があったし、現在でもまだある。独立した形態としての存在自体を疑う意見さえある。(…) 部分冠詞の複数形を **des** としている文法書が多く見られる。しかし厳密に言えば、それは「ハウレンソウ」「リエット」「瓦礫」のように、物質名詞に近くて単数形を持たない単語にしか当てはまらない。

② 実際に古い文法書では、**des** を部分冠詞の複数形としているものがある。

証言 (2)

Les formes de l'article partitif sont : *du* (anciennement *de le, del, deu*), *de l'*, *de la, des* (anciennement *de les, dels*). La partition ou division est marquée par la préposition *de*, qui est par excellence la préposition de la séparation.

(Anglade, Joseph, *Notes sur l'emploi de l'article en français*, Didier, 1930)

部分冠詞の形態は、**du** (古くは *de le, del, deu*)、*de l'*、*de la* と **des** (古くは *de les, dels*) である。(指しているものの) 分割は前置詞 *de* によって示されている。*de* は分離を表すのに最も適した前置詞である。

③ また次のように部分冠詞の存在に疑義を呈する文法書もある。

証言 (3)

Son existence est contestée par un certain nombre de grammairiens. On remarque, en effet, que c'est la préposition (mais est-elle encore une préposition dans cet emploi ?) qui apporte la nuance partitive. En outre, le système du « partitif » ne semble guère cohérent : **du beurre** (partie d'une substance continue) ; **des beurres** (parties d'un ensemble discontinu) : il est bien difficile par conséquent de parler de singulier et de pluriel ; **des**, partitif, n'est pas le pluriel de **du**, mais celui de **un** indéfini.

(Bylon, Christian & Paul Fabre, *Grammaire systématique de la langue française*, Nathan, 1978.)

部分冠詞の存在について異議を唱える文法家もいる。実際のところ、部分というニュアンスを伝えているのは前置詞である (しかしこの用法においてそれはほんとうに前置詞

だろうか)。おまけに部分冠詞の体系は一貫性を欠いている。連続した物質の一部は **du beurre** 「(いくらかの) バター」と言い、何種類かの集まった不連続な集合の一部は **des beurres** 「(何種類かの) バター」と言う。したがって [部分冠詞の] 単数形と複数形を立てるのは困難である。部分を表す **des** は **du** の複数形ではなく、不定冠詞 **un** の複数形である。

(12) 部分冠詞の存在に否定的な意見は次の文献を参照のこと。

Kupferman, Lucien, “L’article partitif existe-t-il ?”, *Le Français moderne* 47, 1979.

また現代の意味論の観点から見て、**des** は **du / de la** と近い性質を持つという点については次の文献に詳しい。**des N** は **un N** の複数というよりは、**du N** のような非可算の性質を示すことが論じられている。

Bosveld-de Smet, Leonie, *On Mass and Plural Quantification : the Case of French des / du-NP*, University Press, Groningen, 1998.

Bosveld-de Smet, Leonie, “Les syntagmes nominaux en *DES* et *DU* : un couple curieux parmi les indéfinis”, Bosveld-de Smet, Léonie et als. (eds), *De l’interprétation à la quantification : les indéfinis*, Artois Presses Université, 2000.

また部分冠詞の形成については次の文献を参照のこと。

Carlier, Anne, “Les articles *du* et *des* en synchronie et en diachronie : une analyse de leur résistance à l’interprétation générique”, *Revue Romane* 35, 2000.

3.3. 不定冠詞・部分冠詞をめぐるいくつかの問題

(12) 前置詞 **de** との衝突回避

前置詞 **de** のすぐ後に続く不定冠詞複数形 **des** と部分冠詞 **du / de la** は省略され、名詞は無冠詞となる。

a. la maison couverte **de + des** ardoises スレート葺きの家

→ la maison couverte **d’**ardoises

b. une colline couverte **de + de la** neige 雪に覆われた丘

→ une colline couverte **de** neige

c. avoir besoin **de + du** lait ミルクが少し必要である

→ avoir besoin **de** lait

その理由は省略される冠詞の歴史的形成を考えればすぐわかる。不定冠詞複数形の **des** も部分冠詞も〈前置詞 **de** + 定冠詞〉から生まれたものである。もし **de + des** や **de + du** という連続があれば、それは〈**de + de + les**〉〈**de + de + le**〉となり前置詞 **de** が重複してしまう。その形態に前置詞 **de** が含まれているという意識のせいで重複が回避されるようになったと考えられる。

(13) 形容詞の前で **des** が **de** に変化する

〈**des** + 形容詞 + 名詞の複数形〉のとき、**des** は **de** に変化するとされている。

a. **des** + jolies fleurs → **de** jolies fleurs

これは「Maupas の規則」と呼ばれているらしい。

N.B. 出典は Flaux, Nelly, « Les déterminants et le nombre », Flaux, Nelly et als. (eds), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université, 1997. Charles Maupas は *Grammaire et syntaxe française* (1607)の著者。

ただし、次のように〈形容詞＋名詞〉が複合名詞化しているときはその限りではない。

b. **des** jeunes filles, **des** jeunes gens, **des** grands hommes, **des** petits pois

この規則は *Grammaire de l'Académie Française* (1933) にも書かれているが、日常の話し言葉では守られないことも多い。なぜこのような規則が定着したのかは不明で、説明している文法書も皆無である。

また形容詞の前で部分冠詞の **du / de la** も **de** に変化すると説かれることがある。

c. Pourquoi le boulanger est-il heureux d'avoir fait **de** bon pain ? (Vercors, *Yeux*)

しかし朝倉季雄『フランス文法メモ』(1984)の「65. du bon pain / de bons hôtels」の項で論じられているように、この変化は古文調で古めかしく現在では守られていない。

(14) 他動詞の直接目的補語に付く不定冠詞と部分冠詞は、文が否定されると **de** に変化する。これはどんな初級文法にも書かれている規則である。

a. Il a **un** vélo. 彼は自転車を持っている。

→ Il n'a pas **de** vélo. 彼は自転車を持っていない。

b. Elle mange **des** croissants. 彼女はクロワッサンを食べる。

→ Elle ne mange pas **de** croissants. 彼女はクロワッサンを食べない。

c. Il a acheté **du** vin. 彼はワインを買った。

→ Il n'a pas acheté **de** vin. 彼はワインを買わなかった。

d. Il y a **du** vinaigre dans la bouteille. 瓶には酢が入っている。

→ Il n'y a pas **de** vinaigre dans la bouteille. 瓶には酢が入っていない。

不定冠詞・部分冠詞の付く名詞が直接目的補語でないときは変化しない。

e. C'est **une** symphonie de Mozart. [une symphonie de Mozart は être の直接属詞]

これはモーツァルトの交響曲だ。

→ Ce n'est pas **une** symphonie de Mozart.

これはモーツァルトの交響曲ではない。

f. Il ressemble à **un** singe. [un singe は間接他動詞の間接目的補語]

彼はサルに似ている。

→ Il ne ressemble pas à **un** singe.

彼はサルに似ていない。

否定されても不定冠詞・部分冠詞が **de** に変化しないこともある。文法書では次のように書かれている。

① 目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015.

de に変化するのは否定が絶対的な場合に限る。次の場合は **de** にならない。

a. 直接目的語が補語で限定されていて、否定が相対的な場合

Je n'ai pas **de** l'argent pour le gaspiller.

私には浪費するためのお金はない。

b. 反語的意味の否定疑問文

N'avez-vous pas **des** amis ?

友達がいらないのですか。

c. 前置詞 sans を用いた二重否定

Il ne parle pas français sans faire **des** fautes.

彼は間違わずにはフランス語が話せない。

d. 対象の区別を選択するとき

Je ne demande pas du poisson, mais de la viande.

魚ではなく肉を頼んでいるのです。

② 朝倉季雄『フランス文法ノート』白水社、1981.

朝倉は同じ **ne ... pas** による否定でも、動詞が否定されている場合、補語や副詞が否定されている場合、文全体が否定されている場合があると説く。つまり否定の作用域（スコープ）がどこに及んでいるかである。

a. **Il ne danse pas.** → 否定は動詞にかかる

彼は踊らない。

b. **Il ne danse pas bien.** → 否定は副詞 **bien** にかかる

彼は踊りが上手ではない

c. **Il ne travaille pas chez lui.**

彼は自宅で仕事をしない。

→ 否定が **chez lui** にかかれば **Il travaille ailleurs.**「彼は他の場所で仕事をする」

→ 否定が **travaille** にかかれば **Il se repose chez lui.**「彼は自宅ではのんびり過ごす」

これを踏まえて朝倉は、〈動詞＋直接目的語〉が全面的に否定されるのではなく、直接目的語だけが否定されたり、文全体が否定されたりするときには、不定冠詞・部分冠詞は **de** にならないと説く。次のようなケースがあるとされている。

(A) 対立

Je ne demande pas du pain, mais du gâteau.

パンをくださいと言っているのではなく、ケーキをくださいと言っているのです。

(B) 否定疑問文

Tu ne dis jamais du mal des autres, toi ?

他人の悪口を決して言わないって、きみが？

(C) 全文の否定

Ne me dis pas un mensonge ! Un mensonge inutile.

おれにうそを言うのはやめてくれ。無用なうそはな。

(D) 直接目的語に形容詞(句)、殊に **plus / aussi**＋形容詞、指示的価値の形容詞 (**un tel, pareil, comme ça**)などが付くと不定冠詞・部分冠詞が用いられやすい。

Je n'ai pas une grande confiance en toi.

わたしは君を大して信頼しているわけではない。

Je n'ai jamais prétendu une chose pareille.

そんなことを主張したことは決してありません。

(E) **pas un seul** の意のとき (ただしこの場合の **un** は数詞)

Il n'y avait pas un souffle de vent, pas un bruit, pas un mouvement.

そよとの風もなく、物音一つなく、動くもの一つなかった。

しかしいずれも用法の列挙に終止していて、なぜ不定冠詞・部分冠詞が **de** に変化しないのかについての一貫した説明がない。

《疑問》直接目的補語に付く不定冠詞・部分冠詞はなぜ否定で **de** に変化するのか？

この疑問に答えるためには、次の三つの問題の予備的考察が必要である。

- ① 直接目的補語はふつう文の焦点の位置であり、新たに登場した名詞句がいちばん多く現れる場所である。新たに登場した名詞句には、不定冠詞・部分冠詞が付くことが多い。
- ② 文の否定は焦点にかかる。
- ③ **un N / du N** は N が存在することを表す。否定されると直接目的補語は存在しなくなるので、**un N / du N** は **de N** へと姿を変える。

(15) 文中の項位置での名詞句・代名詞の出現率

項 (argument) とは主語、直接目的補語、間接目的補語を指す。文を作る主要な要素である。項の位置に生じることができる名詞句・代名詞の組み合わせは次のようになる。

- a. *Elle s'est endormie.* [主語=代名詞]
彼女は寝入った。
- b. *Le facteur passe.* [主語=名詞句]
郵便屋さんが通る。
- c. *Mon frère a quitté la boîte.* [主語=名詞句、直接目的補語=名詞句]
兄は会社を辞めた。
- d. *Il a bu du café.* [主語=代名詞、直接目的補語=名詞句]
彼はコーヒーを飲んだ。
- e. *Mon père l'a vu.* [主語=名詞句、直接目的補語=代名詞]
父がそれ(彼)を見た。
- f. *Elle l'a dit.* [主語=代名詞、直接目的補語=代名詞]
彼女はそう言った。

しかしこの組み合わせのすべてが同じように用いられる訳ではない。実際に用いられる組み合わせは大きく偏っている。東郷が作成した会話フランス語のコーパス (Grenoble corpus) を調査したところ、名詞句と代名詞の分布は次のようになっていた。

I. 自動詞 SV	S が代名詞	35
	S が名詞句	2
II. 他動詞 SVO	S も O も名詞句	3
	S が名詞句・O が代名詞	0
	S が代名詞・O が名詞句	34
	S も O も代名詞	10

次は Grenoble Corpus の一部である。話題は初めて日本を訪れたときに日本の食べ物はどう感じたか。名詞句はボールド体にしてある。

Oui ben **les quinze premiers jours** ça étonne / c'est pas que c'est pas bon / mais c'est que ça te dit rien du tout quoi / t'as vu **les plats** / bon ben ya **des choses** / on dit que c'est mangeable / ça peut être n'importe quoi / ça peut être **un tableau** / ça peut être n'importe ... / alors ça ne donne pas envie de manger / et puis bon au fur et à mesure tu ... tu apprends **les goûts** donc / ya **des choses** très très bonnes **du style** « sushi » / **le poisson cru** c'est c'est vraiment délicieux / j'ai rien mangé de meilleur / puis ya **des choses** aussi /

beignet de bout de pieuvre je crois / un peu tu vois ça / on te dit tu vois les morceaux ... / et finalement c'est très bon.

えーっと、最初の2週間は「日本の食べ物に」びっくりだよ。おいしくないってことじゃなくて、「出されたものが」何かわからないんだ。料理が出て来るよね。いろいろ並べてあるんだ。これは食べられますって言われるんだけど、とにかく何だかわからない。絵かもしれない。何だかわからないんだ。だから食欲が湧かない。でも次第に味を覚えてゆくんだ。寿司のようにとってもおいしい物がある。刺身はほんとうにおいしいよ。あれほどおいしい物を食べたことがない。それからいろいろあるね。蛸の切り身の天麩羅だったかな。ほらわかるだろ。「蛸の」切り身だっていうんだ。実はとてもおいしいんだけどね。

上のテキストに登場した名詞句を分類すると次のようになる。これを見ても名詞句の出現率は直接目的補語で最も高いことがわかる。

直接目的補語 6

les plats / des choses / les goûts / des choses / des choses / les morceaux

属詞 1 un tableau

前置詞句の一部 1 du style

状況補語 1 les quinze premiers jours

主語の左方転位 1 le poisson cru

同格 1 beignet de bout de pieuvre

ここから次のことが言える。

① 自動詞も他動詞も主語は圧倒的多数が代名詞である。

② 名詞句の出現率が最も高いのは直接目的補語である。

(16) ではどうして直接目的補語の位置で名詞句の出現率が最も高いのだろうか。そこには次のような仕組みがあると考えられる。

談話にすでに登場したものは代名詞で表される。名詞句の多くは談話に新たに登場したものを表し新情報である。新情報は直接目的補語の位置に最も現れやすい。このために直接目的補語の位置に名詞句の出現率が高いのである。

直接目的補語の位置に新情報が最も現れやすいのは次のような理由による。

① 動詞が表す出来事が新たな事物を提示する力が及ぶ範囲を意味論の用語で「存在化閉包」(英 *existential closure*) という。次の例で存在化閉包は【 】の中の範囲である。この例が示しているように、状況補語や間接目的補語は定であることが多く、定の項は存在化閉包の外に出る。すでに存在しているからである。

a. Il a construit 【*une cabane*】 dans son jardin.

彼は庭に小屋を建てた。

b. Elle a écrit 【*une lettre*】 au chanteur qu'elle adorait.

彼女は大ファンの歌手に手紙を書いた。

② 直接目的補語は動詞が表す行為が直接及ぶ項である。このために動詞が表す出来事によって新たなものを談話に登場させるのに適しており、他動詞ではふつう直接目的補語が存在化閉包に含まれる。

c. Nicola a rencontré *une Italienne* à la boom.

ニコラはダンスパーティーでイタリア人の女性と出会った。

③ 主語は無標の主題 (thème / topic) である。主題は定でなくてはならないため、主語位置に新しく登場するものを置きにくい。フランス語ではこういう場合のために非人称構文がある。非人称構文で実主語が置かれるのが直接目的補語の位置であることを見ても、直接目的補語が新情報を置くのに最も適した場所であることがわかる。

d. ?*Un livre est sur la table.* テーブルの上に本がある。

→ *Il y a un livre sur la table.*

e. *Trois soldats sont arrivés.* 兵士が3人到着した。

→ *Il est arrivé trois soldats.*

(17) 否定は新情報 (焦点) にかかる

否定文を考察する場合、否定の作用域ばかりではなく、新情報の焦点 (focus) を特定することも重要である。(…) ここで重要なのは、「焦点」は否定の〈作用域〉の中に含まれていなければならないという点である。

(2) [I didn't leave HOME] because I was afraid of my FATHER.

ぼくは家を出なかった。だっておやじが怖かったから。

(3) [I didn't leave home because I was afraid of my FATHER]

ぼくが家を出たのは、おなじが怖かったからじゃない。

(2)では、二つの節にそれぞれ文強勢があるが、まず **home** に否定の「焦点」が置かれるので、**because** 節は否定の「作用域」の外にあることがわかる。一方、(3)では、一つの節は同じ音調で発話され、最後の降昇調で発音される **father** に「焦点」が置かれるので、**because** 節が否定の「作用域」に入り、主節は「前提」として肯定に解釈される。(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社、2005)

→ 上の例を図式的に表すと次のようになる。**NEG** []は否定の及ぶ作用域を表す。

(2) **NEG** [I left home], [because I was afraid of my father]

→ **NEG** の作用域は [I left home]までで、残りはその外にある。

(3) [I left home], **NEG**[because I was afraid of my father]

→ **NEG** は **because** 節を作用域とし、[I left home]はその外にある。

(18) フランス語でも同様に否定が焦点にかかることは次を見ても明らかである。ボード・イタリックの部分がある文の焦点である。

a. *Je n'ai pas écrit ce livre pour Marie.*

私はマリーのためにこの本を書いたのではない。

→私はこの本を書いた。しかしそれはマリーのためではない。

b. *Il n'a pas examiné ce document avec attention.*

彼はこの文書をていねいに調べなかった。

→彼はこの文書を調べたが、それはていねいではなかった。

a. *Rome ne s'est pas construite en un jour.*

ローマは一日にして成らず。

→ローマは完成したが、それは一日でできたのではない。

(19) **un N / du N** は「Nが存在する」ことを表す。

a. *J'ai cassé une tasse à café.*

私はコーヒーカップを割った。

→ Il y a une tasse à café telle que je l'ai cassée.

私が割ったコーヒーカップがある。

b. Elle a mis **du** sel dans la soupe.

彼女はスープに塩を入れた。

→ Il y a du sel tel qu'elle a mis dans la soupe.

彼女がスープに入れた塩がある。

文が否定されると直接目的補語の存在は否定され、存在しなくなるために **un N / du N** ではなく **de N** を使うと考えることができる。

a. Je n'ai pas cassé **de** tasse à café.

私はコーヒーカップを割らなかった。

→ 私が割ったコーヒーカップはない。

b. Elle n'a pas mis **de** sel dans la soupe.

彼女はスープに塩を入れなかった。

→ 彼女がスープに入れた塩はない。

(20) このように考えれば文法書で不定冠詞・部分冠詞が **de** にならないとされるケースをうまく説明できる。

a. Je n'ai pas **de** l'argent pour le gaspiller.

私には浪費するためのお金はない。

= J'ai **de** l'argent, mais ce n'est pas pour le gaspiller.

私がお金を持っているが、それは浪費するためではない。

→ 否定は pour le gaspiller にかかり de l'argent は否定の作用域の外にある。

b. N'avez-vous pas **des** amis ? 友達がいらないのですか。

= Vous niez vraiment que vous avez (avez) **des** amis ?

あなたはほんとうに友達がいることを否定するのか。

→ des amis の存在を前提している。

c. Il ne parle pas français sans faire **des** fautes.

彼は間違わずにはフランス語が話せない。

= Quand il parle français, il fait toujours **des** fautes.

フランス語を話すとき彼はいつも間違ふ。

→ 二重否定によって des fautes の存在は肯定されている。

d. Je ne demande pas **du** poisson, mais **de** la viande.

魚ではなく肉を頼んでいるのです。

= Ce n'est pas **du** poisson que je demande ; c'est **de** la viande.

私が頼んでいるのは魚ではなく肉だ。

→ 私が頼んでいるものは存在している。ただその種類がちがうだけ。

e. Ne me dis pas **un** mensonge ! Un mensonge inutile.

おれにうそを言うのはやめてくれ。無用なうそはな。

= Tu me dis **un** mensonge. Arrête ça.

君はおれにうそを言っている。それはやめろ。

→ un mensonge の存在は肯定されている。

f. Je n'ai pas **une** grande confiance en toi.

わたしは君を大して信頼しているわけではない。

= Je fais confiance en toi, mais cette confiance n'est pas grande.

→ confiance の存在は肯定されていて、ただそれが大きくはないと言っている。

(21) **un N / du N** が直接目的補語でないときは **de** に変化しないことも説明できる。

a. C'est **un** tableau de Degas. [un tableau de Degas は属詞]

これはドガの絵です。

→ Ce n'est pas **un** tableau de Degas. これはドガの絵ではありません。

N. B. être の属詞位置の名詞句は指示的ではないので、もともと un tableau de Degas はドガの絵の存在を意味しない。このことも de に変化しない理由である。

b. Ce château appartient à **une** famille noble. [une famille noble は間接目的補語]

この館は貴族の家の持ち物だ。

→ Ce château n'appartient pas à **une** famille noble.

この館は貴族の家の持ち物ではない。

b.ではこの館が貴族の家の持ち物であることが否定されたとしても、その貴族の家が存在しないことにはならない。

(22) 否定されても定冠詞が **de** に変化しないことも説明できる。次の例でミステリー小説の存在は前提されているため、否定の作用域の中に入らない。

a. Elle aime **les** romans policiers.

彼女はミステリー小説が好きだ。

→ Elle n'aime pas **les** romans policiers.

彼女はミステリー小説が好きではない。

3. 4. 定冠詞

(23) 定冠詞の形成

定冠詞の元はラテン語の指示代名詞・指示形容詞の **hic, iste, ille** である。**hic** は近称で「これ」「この～」、**iste** は中称で「それ」「その～」「君の～」、**ille** は遠称で「あれ」「あの～」を意味した。

a. *hic princeps* この大将 / *ista oratio* その（君の）演説 / *ille Gallus* あのガリア人

ille は単独で3人称の人称代名詞としても用いられ、その後現在の **il** へと変化した。**illúm** のように第2音節にアクセントがあるものが語頭音節を失い、定冠詞の **le** と目的格代名詞の **le** へと変化した。従って、現代語の主語人称代名詞 **il** と定冠詞 **le** と目的格人称代名詞 **le** は同じ語に由来する。古フランス語の定冠詞は次のとおり。

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	li	li	la	les
斜格	lo, le	les		

このうち斜格形の **le / les** と女性形の **la / les** が現代語の定冠詞となった。

4. 可算名詞と非可算名詞

4.1. 可算と非可算の区別はどうやって決まるのか

授業で不定冠詞と部分冠詞を習うとき、不定冠詞は可算名詞に付き、部分冠詞は非可算名詞に付くと習う。するとどういふ名詞が可算名詞で、どういふ名詞が非可算名詞なのかという説明が必要だが、これについて十分に説明されることは少ない。

(1) 英語の標準的文法では次のような名詞が非可算とされている。

a. **substances** (物質) : wood, plastic, leather, chalk, cloth, cotton

b. **metal** (金属) : iron, gold

c. **food** (食物) : flour, rice, bread, wheat, sugar, meat, fish, fruit

d. **liquids** (液体) : water, milk, oil

e. **gases** (気体) : air, smoke, oxygen

f. **abstract ideas** (抽象名詞) : information, knowledge, advice, education, space, time, power, history

(Leech, G. , *An A-Z of English Grammar & Usage* , Arnold, 1989)

(2) 可算名詞と非可算名詞の説明には次のようなものがある。

① 数えられるほど輪郭がはっきりしているか

「一つ、二つ」と数えるためには、物の輪郭がはっきりしていなくてはならない。

「本」や「木」は輪郭がはっきりしているので可算名詞である。しかし「水」や「砂」は形が定まっておらず、輪郭がはっきりしない。だからこれらは非可算名詞である。樋口昌幸『英語の冠詞』（開拓社、2009）が「姿なければ冠詞なし」としているのはこの説明方法である。

〔疑問〕しかし英語の fruit「果物」や furniture「家具」は輪郭がはっきりしているように思えるが非可算名詞である。フランス語の raisin「ブドウ」や ail「ニンニク」も形があるのに非可算なのはなぜだろうか。

② 連続的か非連続的か

可算名詞を特徴づけるのは「非連続性」である。table「テーブル」は、ここからここまでがテーブルで、端を越えると空間になる。これにたいして非可算名詞を特徴づけるのは「連続性」である。プールに溜まっている水はそのどこを掬っても水で同じである。パンはどこを切り取ってもパンである。

認知言語学ではこのような特徴を boundedness「有界性」と呼んでいる。可算名詞は bounded「有界的」で、非可算名詞は unbounded「非有界的」である。石田秀雄『わかりやすい英語冠詞講義』（大修館書店、2002）はこの説明を採用している。

③ 半分に切っても元のままか

上の②をもう少しわかりやすいように変えた説明がある。「半分に切れるか」というものである。パンは半分に切っても変わらずパンで食べられるし、コップの水を半分に分けても飲める。半分にしても元の性質・用途を失わないのが非可算名詞である。一方、机は半分に切ったらもう机として使えない。本も半分にしたらもう全部読めなくなる。半分にしたら元の性質を失ったり使えなくなるものが可算名詞である。courage「勇気」のような抽象名詞はそもそも半分に切ることはできない。だから非可算名詞である。

〔疑問〕しかしこの説明にも難点はある。une gomme「消しゴム」は可算名詞だが、半分に切っても消しゴムとして使える。また une pomme「リンゴ」は半分に切っても食べることができ、元の性質を失っているとは言えない。

(3) 上のような説明にはひとつ問題がある。それは可算・非可算の区別は言語によらずれがあるということである。

fruit「果物」は英語では非可算名詞だがフランス語では可算名詞である：C'est un fruit délicieux.「それはとても美味しい果物だ」。また「髪の毛」は英語では非可算名詞 hair だが (She has much hair.)、フランス語では可算名詞である：J'ai trouvé un cheveu dans la soupe.「スープの中に髪の毛を一本見つけた」。また「家具」furniture は英語では非可算名詞だが、フランス語 meuble は可算名詞である。したがって、可算・非可算の区別を指示対象の物理的性質に求める説明はどこかで破綻する。

(4) 可算・非可算の区別はそれぞれの言語での物事の捉え方を反映している。

認知意味論は、これまでの意味論に対して、意味が概念的なものであることを何の抵抗なく受け入れる。そして、意味を人間の外界認識の産物であると考え。この考え方によれば、語の意味は、外界の指示物を決定するものというよりも、認識された外界をカテゴリー化 (categorization) したものである、ということになる。(…)

ラネカーは、認知意味論における意味観を次のようにまとめている。

表現の意味とは、表された状況を客体的 (objective) に特徴づけることに還元することはできない。言語学的意味論にとって同等に重要なのは、認識主体が、表現のための選択のなかで、どのように状況を解釈 (construe) し、描き出すかである。(Langacker, Ronald, W., *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2, Stanford University Press, 1991)

実際、意味の現象を見ていくと、言語学的な意味が客観的な外界を直接反映したものではなく、認識主体の主観的解釈 (subjective construal) に基づいていることを示す現象が多く存在する。(…)

例えば、日本語で数量を表す際に用いられる類別詞「本」の用法を考えてみよう。「本」は鉛筆、ひも、木など、細長い (一次元的な) 物体に対して使われる。ここで問題はどのくらい細長い物体であれば「本」を使えるのかである。実際に「本」で数えられるものを詳細に見ると、針や鉛筆のほかに、歯、ウィスキーのボトルなど、あまり細長いものとはいえないものまで含まれている。(…) このような境界線に関する判断は言語の規約 (convention) による。これは、意味が言語の約束事としての概念であることを示している。

(松本曜編『認知意味論』、第 1 章 松本曜「認知意味論とは何か」、大修館書店、2003)

N.B. 言語の意味が「約束事」(convention) に基づいているというのはひと昔前の構造主義言語学の考え方なので、これは松本の筆の誤りというものである。認知言語学では、語の意味には「動機付け」(motivation) があると考えられており、単なる約束事ではない。

(5) 語が表すカテゴリー化がその言語による物事の「捉え方」によっているということを示す事実は数多くある。

① 英語では、trousers「ズボン」、pants「ズボン」、glasses「メガネ」、scissors「ハサミ」、tongs「トング」、nippers「やっこ」は常に複数形で使われる。「ズボン一着」は a pair

of trousers である。これはズボンが右の足と左の足からできているという捉え方をしているからである。そのような捉え方をしないフランス語の un pantalon は単数形で使われる。

② 同じ一つの言語の中でも、une feuille「木の葉」のように対象を個別的に捉える語と le feuillage「葉叢」のように集合的に捉える語の区別がある。

un bijou 宝石 ～ la joaillerie 宝飾品

une vache 牝牛 ～ le bétail 家畜類

une lettre 手紙 ～ le courrier 郵便物

un homme 人 ～ du monde 人混み

un employé 従業員 ～ le personnel 職員、スタッフ全体

(6) このように、言語とは私たちの外にある「客観的現実」を忠実に映す鏡ではない。素朴な言語観では、外界の現実の中にすでにある区別が、そのまま言語に反映されていると見なす。つまり、現実には「松」「杉」「カエデ」という樹種があり、言語はそれに pin、cèdre、érable というラベルを貼ったものにすぎないという見方である。これを「言語名称目録観」と呼ぶ。この素朴な見方は正しくない。言語を作り上げて来た人々が、外界の現実を「どのように捉えたか」が言語に現れているのである。従って、可算名詞と非可算名詞の区別が言語によって異なるのはむしろ当然と言える。

4.2. 可算・非可算の融通性

(7) 英語の学習辞典では、重要な名詞に関しては可算名詞に [C]、非可算名詞に [U] という記号が付いて区別を示している。ところが現在刊行されているフランス語の学習辞典には可算・非可算の区別を示しているものはひとつもない。これはどうしてなのだろうか。仏和辞典を編纂する人の怠慢なのだろうか。

N.B. 『プチロワイヤル仏和辞典』改訂新版 (1996)では [C][U] の記号を付けたが、次の版からはやめてしまった。仏和辞典では *Dictionnaire du français langue étrangère, Niveau I* (Larousse) が例外的に可算・非可算の別を表示している。

(8) 実はそうではない。名詞の可算・非可算の区別は、その名詞のいちばん普通の用法での単なる目安に過ぎず、可算名詞とされるものが非可算として使われたり、非可算名詞が可算的に用いられることが多いのである。だからフランス語で [C][U] の区別を辞書レベルで表示すると間違った思い込みを植え付けることになってしまう。

次は可算・非可算の融通性を表すごく一部の例である。

a. i) Nous avons vu *des bœufs* dans la prairie. [可算]

私たちは草原に牛を見た。

ii) Il a mangé *du bœuf*. [非可算]

彼は牛肉を食べた。

b. i) Il a consommé trois *verres* de vin. [可算]

彼はグラス3杯のワインを飲んだ。

ii) Elle a acheté un *cendrier en verre*. [非可算]

彼女はガラス製の灰皿を買った。

c. i) *Mon fils a un vélo vert.* [可算]

うちの息子は緑色の自転車を持っている。

ii) *Il fait du vélo le dimanche.* [非可算]

彼は日曜にはサイクリングをする。

ふつうは可算名詞である抽象名詞でも、次のように可算的に用いられる。例は鷲見洋一『翻訳仏文法』（ちくま学芸文庫）から。

d. *Toutes les solitudes de la terre sont moins vastes qu'une seule pensée du cœur de l'homme.* この地上で人の住まぬ土地をことごとく集めてみても、人の心に浮かぶたった一つの思念の広さには及ばない。

e. *J'ai reçu et baisé votre lettre, et lu vos tendresses avec des sentiments qui ne s'expliquent point.* お手紙をいただき、口づけいたしました。愛情のこもったお言葉の数々を読んだときの気持ちは、とうてい言い表すことができません。

(9) ここで大事なことは、同じ名詞を可算として使うときと非可算として使うときとは意味が異なるという点である。フランス語は高度に発達させた冠詞によって、意味の違いを語彙的に処理するのではなく、文法的に処理する方法を生み出した。

誰でも知っているのは、生きている動物は可算名詞、その肉は非可算名詞で表されるという例である。

un bœuf 牛	du bœuf 牛肉
un porc 豚	du porc 豚肉
un poulet 若鶏	du poulet 鶏肉
un mouton 羊	du mouton 羊肉
un veau 仔牛	du veau 仔牛肉

英語では対照的に動物と肉には異なる語彙を当てている。これは 1066 年にノルマン征服王朝が成立し、英語にフランス語の語彙が大量に流入した結果である。

a cow / ox 牛	beef 牛肉
a pig / swine 豚	pork 豚肉
a chicken 若鶏	chicken 鶏肉
a sheep 羊	mutton 羊肉
a veal 仔牛	veal 仔牛肉

これは **un N** が「N 丸ごと一つ」を表すのにたいして、**du N** が「N の部分をいくらか」を表すというそれぞれの冠詞の基本的意味から生まれたものである。

4.2.1. 可算から非可算への移行

上に挙げた「動物」から「その肉」以外にも可算名詞が非可算的に用いられることによって意味が規則的に変化する場合がある。

(10) 物からそれを用いた活動へ

a. *Elle a acheté des skis.*

彼女はスキーを買った。 [=スキー板]

b. *Elle fait du ski tous les hivers.*

彼女は毎年冬にスキーをする。

c. Il possède *un cheval*.

彼は馬を所有している。

d. Il fait *du cheval*.

彼は乗馬をする。

e. Qu'est-ce qu'ils auront ? — *De la maison de correction*. (Anouilh, *Pièces noires*)

「あの子どもたちはどうなるのだろうか」「少年院送りさ」

(11) 個別的把握から集合的把握へ

a. Il a attrapé *un saumon*.

彼は鮭を一匹捕まえた。

b. Il y a *du saumon* dans cette rivière.

この川には鮭がいる。

c. Il faut absolument que je tue *du pauvre*, ce soir. (Anouilh, *Pièces grinçantes*)

今夜は是が非でも貧乏人を殺さなくては。

d. Avez-vous *du malade* aujourd'hui ?

今日は患者がいますか。

(Damourette, S. & E. Pichon, *Des mots à la pensée. Essais de grammaire de la langue française*, 1930-47)

◆このような集合的な物の捉え方は *massification* 「物質化」 (=かたまり的な把握) と呼ばれている。

La « sélection » des noms non comptables imposée par le partitif n'empêche pas qu'on puisse l'employer devant un nom comptable ; mais il se produit un effet de « massification » depuis longtemps noté par les linguistes : le partitif efface les limites naturelles des individus, limites qui les constituent en tant que tels (*vendre du roman policier*). Il est bien connu que l'effet de massification est plus fort avec des noms désignant des objets animés (*vendre du chat d'appartement*) ; et que l'emploi avec les noms désignant des humains est plus rare encore est très *marqué* stylistiquement (*accompagner du touriste à travers la ville*).

(Flaux, Nelly, « Les déterminants et le nombre », Flaux, Nelly et als. (eds), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université, 1997)

部分冠詞は非可算名詞を「選択」するが、だからといって可算名詞に使えないわけではない。しかしその場合、「物質化」という効果が生じることは、ずっと以前から言語学者によって指摘されてきた。部分冠詞は、もともと備わっている個体を個体たらしめている境界を消してしまう。ex. 「ミステリー小説を売る」よく知られているように、物質化の効果は有生物をさす名詞のほうがより高い。ex. 「アバルトマンで飼うのに向いたネコを売る」また人間をさす名詞に用いることは稀であり、用いた場合は文体的に非常に有標となる。

ex. 「観光客を町の到る所に案内する」

(12) 個体からその特性へ

a. Il y a *du professeur* en lui.

彼には教師めいたところがある。

b. Il y avait à la fois *du serpent* et *du tigre* dans cette creature patiente et implacable !

(A. Dumas, *Les Mohicans de Paris*)

この忍耐強く冷酷な被造物は蛇のような性質と虎のような性質を兼ね備えていた。

《補足》

可算名詞から非可算名詞への移行ではないが、もともと数える対象ではない **le N** が非可算化されて **du N** になる場合もある。

- ① **le soleil, la lune** のような唯一物
- a. **Nous avons *du soleil* aujourd'hui.**
今日は日差しがある。
- b. **Elle revit le jardin *plein de lune*.**
彼女は月光に照らされた庭を思い浮かべた。
- ② スポーツ、学問領域、教科、芸術分野など
- a. **Elle fait *du judo*.**
彼女は柔道をやっている。
- b. **Je fais *de la médecine*.**
私は医学を学んでいる。
- c. **Il fait *de la sculpture*.**
彼は彫刻をやっている。

4.2.2. 非可算から可算への移行

(13) 社会的習慣による単位化

Deux cafés et un thé, s'il vous plaît.

コーヒーふたつと紅茶ひとつください。

(14) 素材から製品へ

- a. **du fer** 鉄 / **un fer** (à repasser) アイロン
- b. **du verre** ガラス / **un verre** グラス、コップ
- c. **du marbre** 大理石 / **un marbre** 大理石の像、石板
- d. **du cuivre** 銅 / **les cuivres** 金管楽器

(15) 空間・用途の限定による可算化

- a. **Il a acheté *du terrain* à la campagne.**
彼は田舎に土地を買った。
- b. ***un terrain* de football / de camping / de sport**
サッカー場 / キャンプ場 / 運動場

(16) 時間的限定による可算化

- a. ***Avez-vous du temps ?***
時間がありますか。
- b. ***L'amour ne dure qu'un temps.***
愛はいつとことのこと。
- c. ***Le bâtiment va très bien ces temps-ci.***
建設業は最近好景気だ。

(17) 抽象から具体へ

- a. ***La beauté* de cette statue antique est inoubliable.**
この古代彫像の美しさは忘れがたい。

b. Elle a visité *les beautés* de cette ville.

彼女はこの町の名所旧跡を訪れた。

(18) 作者から作品へ

「シェークスピア」は作家の名だが、「この劇団は今度シェークスピアを上演する」と言うときは、作家名でその作品を表すメトニミー (métonymie, 換喩) である。固有名詞は数える対象ではないが、メトニミーを通じて作品を表すと可算名詞になる。

a. Il possède *un Picasso*.

彼はピカソの作品を一つ所有している。

b. Elle a acheté *un Laurencin*.

彼女はローランサンの作品を購入した。

c. acheter *une Toyota / une Mercedes / un IBM*

トヨタの車 / ベンツの車 / IBM のパソコンを買う

問題はこのときに付く冠詞の性である。メーカーから製品へのメトニミーでは、冠詞は隠れた製品の名詞に一致する。

e. *une Toyota = un voiture de Toyota*

un IBM = un ordinateur d'IBM

『小学館ロベール仏和大辞典』には次のように書かれている。

f. *un Manet* 一枚のマネの絵 (=un tableau de Manet)

une Rolex ロレックス一個 (=une montre de Rolex)

注：不定冠詞は省略された名詞の性に一致する。

ところが作者→作品のメトニミーでは冠詞は隠れた名詞に一致しない。

g. *un Rodin / *une Rodin*

ロダン彫刻家なので作品は *une statue / une sculpture* で女性名詞のはずだが、付くのは常に男性形不定冠詞である。

h. C'est vraiment *un Balzac*.

これはまるでバルザックの小説みたいだ。

またメトニミーによって可算化された名詞に部分冠詞が付いて再び非可算化されることもある。

i. Il a joué *du Mozart*. (Mozart → un Mozart → du Mozart)

彼はモーツアルトの作品を演奏した。

j. Il y avait *du Colette* à l'examen.

試験にコレットの小説が出た。

((Further readings))

固有名詞に冠詞が付いて作者から作品のメトニミーが起きる現象については、次の文献が詳しい。

Gary-Prieur, Marie-Noëlle, "Du Bach, du Colette : neutralisation du genre et recatégorisation des noms de personne", *Le Français moderne* 58, 1990.

Kleiber, Georges, "Quand le nom propre prend article : le cas des noms propres métonymiques", *French Language Studies* 2, 1992.

N.B. Gary-Prieur は作者から作品のメトニミーではすべて男性名詞扱いになることを

指摘し、その理由は作者の性別が中和されるからだとした。Kleiber はそれを批判しているが、なぜ男性名詞扱いになるかを最終的には説明していない。その理由はおそらく次のようなものである。

トヨタならば自動車メーカーなので、作っているのは自動車 (voiture) である。だから冠詞は隠れた名詞に一致する。しかし芸術家の場合、作る作品は多様である。たとえばピカソは油絵の他に彫刻や陶器なども作っている。このように男性名詞 (ex. un tableau) と女性名詞 (ex. une statue) が混じっていると、文法的性は中和されて男性 (通性) になると考えられる。

(19) 種類の概念が生じるとき

非可算名詞の可算化でいちばんよく目にするのは、**さまざまな種類**という捉え方が関わるケースである。朝倉文法事典には、物質名詞が可算化する場合について次のように書かれている。

「例えば vin は他の物質と区別するための種属名として用いられるときは le vin、その若干量は du vin で表される。この場合 vin は等質のものとみなされる。もし vin に種類・品質の差を考えれば、不特定の1つの種類・品質から見た vin は un vin、いくつかの種類は des vins、その総和が les vins となる。vin の下位種属 vin blanc もこれと同じ考え方から le [du, un]vin blanc, les [des] vins blancs と言われる。」

(「nombre des noms」の項目)

a. la saveur d'un vin あるぶどう酒の風味

b. importer des vins de Grèce ギリシアのいろいろなワインを輸入する

c. les vins de France (Olizet の著書名) フランスのぶどう酒

d. la pollution des eaux (Colas の著書名) 水の汚染

N. B. ただし例 d. の les eaux は「さまざまな種類の水」ではなく、複数形で河川や湖沼を意味する用法なので、ここに入れるのはまちがいである。

朝倉文法事典にあるように、物質名詞の「種類のちがい」を問題にすると、可算化されて不定冠詞 **un / une** が付いたり複数形になったりする。「種類」の概念が生まれる典型的なケースは、名詞に形容詞や関係節が付いた場合である。

C'est un très bon vin. これはとても美味しいワインだ。

C'est une chaleur qui reste. [暖炉の暖かさは] 長く続く暖かさだ。

Agnès a une patience extraordinaire. アニェスはとてつもなく忍耐強い。

(六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK 出版、2016)

Il y a des fromages que je n'arrive pas à avaler, le roquefort par exemple. (Ibid.)

私がどうしても食べられないチーズがある。例えばロックフォールだ。

(20) 「種類」の概念の導入によって不定冠詞が付くのは物質名詞に限らない。次のふたつのケースがある。

① 普通は無冠詞で使われる名詞に形容詞などが付くと不定冠詞が出てくる。

a. Jean est professeur. [属詞の職業名詞]

ジャンは教師だ。

b. Jean est un professeur expérimenté.

ジャンはベテランの教師だ。

c. Michel est *écrivain*. [属詞の職業名詞]

ミシェルは作家だ。

d. Butor est-il *un écrivain* pour écrivains ?

ビュートルはプロの作家好みの作家だろうか。

e. J'ai *faim*. [動詞＋無冠詞名詞の句動詞]

私はお腹が減った。

f. J'ai *une faim* de loup.

私はお腹がぺこぺこだ。

g. Elle parle *français*. [無冠詞がふつうの直接目的補語]

彼女はフランス語を話す。

h. Elle parle *un français* impeccable.

彼女は完璧なフランス語を話す。

② ふだんは限定詞の付かない固有名詞や、定冠詞が付く唯一物も、種類の概念の導入によって不定冠詞が付く。

a. C'est *un Paris* qu'ignorent les étrangers.

それは外国人が知らないパリだ。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

b. On voit le soleil, *un soleil* noir.

太陽が見える、黒い太陽が。

c. Nous vivons dans *un monde* où l'argent est roi.

私たちはお金が王様の世界に生きている。

(21) 朝倉文法事典では抽象名詞が可算化する場合を次のように分けている。

(I) 様々の様態を考えるととき

a. Il a toutes *les ambitions*. 彼はあらゆる種類の野心を抱いている。

(II) 抽象名詞の表わす属性を持つ行為・言葉を表わすとき

dire des sottises ばかげたことを言う、*faire des maladresses* へまをする

les cruautés de Néron ネロの残忍な行ない

(III) 具象的事物を表わすとき

des peintures 数枚の絵、*des sculptures* いくつかの彫像、*des antiquités* 古美術品

des arithmétiques 算数の本

(22) 抽象名詞の複数形は具体的なものを表す

a. mais, quant à voir *les points de vue* et *les curiosités* selon l'ordre des itinéraires, c'est de quoi je me suis toujours soigneusement défendu. Je suis rarement préoccupé des monuments et des objets d'art, et, une fois dans une ville, je m'abandonne au hasard, sûr d'en rencontrer assez toujours pour ma consommation de flâneur. J'ai perdu beaucoup sans doute à cette indifférence ; mais je lui dois aussi beaucoup de *rencontres* et d'*admiration*s imprévues que le guide officiel ne m'eût pas fait connaître ou qu'il m'aurait gâtées.

(Gérard de Nerval : article paru dans *Le Messager*, le 18 septembre 1838)

しかしながら、あらかじめ決められたコースどおりに絶景ポイントや名所を見て回るのは、私が注意深く避けてきたことである。私は立派な建築や美術品に気を取られることはめったにない。いったん町に足を踏み入れると、偶然に身を任せてぶらぶら歩

き回るのだ。そうすればのんびり散策する人間にとって十分な名所や美術品にいつでも出会えるのはまちがいない。なるほどこの無頓着な態度のせいで大いに損をしたこともあるだろう。しかしそのおかげで、公式ガイドブックに従っていたら見落としていたものや、台無しになっていたにちがいない多くのすばらしいものに出会うことができたのである。

b. Mon temps se passait en *indécisions*, en *rencontres* de gens pareils à des spectres.

あれこれ迷ったり、亡霊みたいな連中とつきあったりして暮らしていた。

(鷲見洋一『翻訳仏文法』ちくま学芸文庫)

- | | | | |
|----------------|-----|-----------------|-------------|
| c. la solitude | 孤独 | les solitudes | 人里離れたさびしい場所 |
| la profondeur | 深さ | les profondeurs | 深い所、深海 |
| la pourriture | 腐敗 | les pourritures | 腐ったもの |
| la difficulté | 難しさ | les difficultés | 難しい点、厄介な問題 |

【Further readings】

非可算名詞が可算化されて複数形になる現象については次の文献を参照のこと。
小石悟「不可算名詞の複数形」『フランス文化研究』48号、獨協大学、2017.

4. 2. 3. 複数形の特殊な意味

上で述べたのは抽象名詞を複数にすることで具象化するという現象だったが、名詞の複数形には他に次のような用法がある。

(23) 強意の複数 (pluriel augmentatif)

F. Brunot, *La pensée et la langue* の用語。他に pluriel hyperbolique 「誇張の複数」(A. Dauzat)、pluriel emphatique 「強意の複数」という呼び方もある。

a. *les glaces du pôle* 極地の氷原 / *les neiges éternelles* 万年雪 / *les eaux de mer* 大海原

b. *Toutes mes félicitations.* おめでとうございます。 / *les splendeurs de sa parure* 彼女の装身具のきらびやかさ

(24) 羞恥の複数 (pluriel pudique)

Marcel Cohen, *Regards sur la langue française*, 1950. の用語。

a. *les toilettes* トイレ / *aller aux cabinets* トイレに行く / *les W. C.* トイレ

b. *les parties naturelles* 局部

5. 不定冠詞の用法

5. 1. 朝倉文法事典（伝統文法）

(1) 種属中の不特定な1つあるいは数個の個体を表す。

Je vous apporterai un livre. あなたに本を一冊持って行きましょう。

Il y des arbres dans le jardin. 庭に木が(数本)ある。

(2) 不特定な一個体が同種属の他のすべての個体を代表することがある(総称用法)。

Un homme ne pleure pas. 男は泣くものじゃない。

Un officier n'a qu'une parole. 武士に二言なしだ。

(3) 総称用法から転じて種属の典型を表す。

Celui-là, c'est un officier. この男こそ(真の)士官と言うべきだ。

C'est une ville, Marseille. 立派な町だね、マルセイユは。

(4) 驚き・賞賛などを表す。 *extraordinaire, incroyable, inouï* などが省略されたもの。

Il fait un froid dehors! 外はひどい寒さよ。

Ah! Tu m'as fait une peur! まあ、びっくりした。

Ma foi! c'est une idée. なるほど名案だ。

Vous voilà dans un état! とんだことになりましたね。

d'un(e) + 名詞、**d'un** + 男性形容詞の形で

Il est d'une force! 強いなのなんのって。

Le cadet a des cheveux d'un noir. 弟のほうはまっ黒な髪をしている。

(5) **des** + 数詞で驚き・賞賛を表す

Elle le laisse des six semaines tout seul!

彼女は彼を6週間もひとりぼっちにしておくのか。

(6) **des** は多数の強調を表す

Il s'en passe des choses, dans la vie! 人生にはいろいろなことが起こるものだ。

(7) **des** は性質の情意的表現を表す

Elle le regardait avec des yeux! あの人を妙な目をして見ていましたよ。

5.2. 不定冠詞の機能と意味

(8) 伝統文法では不定冠詞のさまざまな用法が列挙されているが、不定冠詞 **un N** の基本的働きは次のふたつであると考えられる。(総称用法を除く)

① **un N** は **N** の集合から不特定の成員を抜き出す (extraction)。

たとえば *J'ai acheté un vélo.* 「私は自転車を買った」では『自転車』の集合からどれとはわからない一台の自転車を抜き出し、私がそれを購入したことを表す。

② **être** の属詞の位置で用いられた **un N** は、その文の主語が **N** の集合に属する成員であることを表す (attribution)。

C'est une voiture italienne. 「これはイタリア製の車だ」では、「これ」で指されたものが『イタリア製の車』の集合に含まれることを表す。

(9) 用法①では **un N** の指示対象が談話の中に導入される。その指示対象はそれ以後、談話の世界 (univers du discours) に存在すると見なされるので、後続談話において定代名詞で指して話題にすることができる。

a. *J'ai acheté un vélo. Il est rouge.*

私は自転車を買った。それは赤色だ。

un N が外延を持たないとき、指示対象は談話に導入されないので、定代名詞で指して話題にすることができない。

b. *Elle n'a pas un ami. *Il est anglais.*

彼女には友人が一人もない。その友人はイギリス人だ。

c. *Il est muet comme une carpe. *Elle est grise.*

彼は鯉のように無口だ。その鯉は灰色だ。

N. B. 不定名詞句 **un N** が指示を持つかという問題は、現代意味論においていまだに議論されているが、ここではこれ以上は踏み込まない。次の文献を参照のこと。

Lyons, Christopher, *Definiteness*, Cambridge University Press, 1999.

Larson, Richard & Gabriel Segal, *Knowledge of Meaning. An Introduction to Semantic Theory*, MIT Press, 1995.

(10) 用法②の **être** の属詞に置かれた名詞句は指示を持たない（非指示的 non référentiel）。これは定名詞句でも同じである。

a. *Le fiancé de Jacqueline est le vice-consul de France à Madrid.*

ジャクリーヌの婚約者はマドリッド駐在のフランス副領事だ。

この例では「ジャクリーヌの婚約者」という人と「マドリッド駐在のフランス副領事」という人がいて、二人は同一人物だと述べているのではない。属詞の *le vice-consul de France à Madrid* は属性を表しているので、外延を持たない。

b. *Marcel est un metteur en scène mondialement connu.*

マルセルは世界的に有名な演出家だ。

un N も同様で、属詞の *un metteur en scène mondialement connu* は属性を表し外延を持たないので、談話に新たな指示対象を導入しない。したがってこれを定代名詞で指して後続談話で話題にすることはできない。

c. *Marcel est un metteur en scène mondialement connu. *Celui-ci travaille avec de nombreuses troupes.*

マルセルは世界的に有名な演出家だ。この演出家は多くの劇団と仕事をしている。

N.B. 1. 英語では属詞（英文法では主格補語）に置かれた名詞句に関係節を付けるとき、たとえ人であっても *who* ではなく *which* を使うのもこのためである。

John is a good teacher, which you are not.

ジョンはいい教師だが、あなたはそうではない。

N.B. 2. ただし次のような同定文では属詞名詞句は指示を持つ。

i) *La capitale de la France, c'est Paris.*

フランスの首都はパリです。

ii) *Qui a peint ce tableau ? — C'est moi.*

「この絵を描いたのは誰ですか」「私です」

Paris, moi はもちろん指示的である。同定文〈*A est B*〉は内包しか持たない *A* に *B* という外延を指定する働きがある。したがって属詞が非指示的だというのは属性を述べる記述文に限ったことである。

(11) 初級文法で習うように、属詞位置に置かれた名詞句が職業・身分・国籍などを表すときは冠詞を付けない。

a. *Nicole est étudiante* . ニコルは大学生だ。

b. *François est informaticien* . フランソワは IT 技術者だ。

c. *Anastasia est polonaise* . アナスタシアはポーランド人だ。

ただし、すでに述べたように名詞句に形容詞・関係節が付いて「種類」の概念が生じると不定冠詞を付ける。

d. *Christian est un professeur expérimenté* . クリスティアンはベテラン教師だ。

属詞位置の身分などを表す名詞に冠詞が付かないのは、その名詞に外延がなく属性だけを表しているために、集合への帰属を表す必要がないからである。このため属詞

位置の名詞は形容詞と似た振る舞いをすることがある。

e. *Colette est très femme*. コレットはとても女性らしい。

f. *Denise est très musicienne*. ドニーズはとても音楽がじょうずなのです。

(朝倉季雄『フランス文法覚え書き』白水社、1967)

(12) 〈être N〉と〈être un N〉とで意味の違いが生じることがある。

En considérant les deux phrases suivantes :

(16) Je suis soldat.

(17) Je suis un soldat.

Sauvageot (1964, p. 20) remarque la différence entre (16) et (17) comme suit :

dans le premier cas, je dis que j'ai les qualités de soldat et dans le deuxième que je m'identifie entièrement à la catégorie des hommes qui sont soldats.

Ainsi, il faut dire que l'attribut *un soldat* dans (17) garde son statut nominal.

(Furukawa, Naoyo, *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho, 1986)

次の2つの文を比較して、ソーヴァジョ (1967)はちがいを次のように述べている。

「(16)では、話し手は自分が兵士という属性を持っていると述べているが、(17)では話し手は兵士というカテゴリーに全面的に帰属していると述べているのである」

このように (17) の *un soldat* という属詞は名詞句としての資格を保持している。

cf. Sauvageot, Aurélien, "De quelques particularités de l'attribut du français contemporain", *Le Français dans le monde* 28, 1964)

六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK 出版、2016.には次のような例がある。

Je suis *un médecin* ! 私は医者なんだから！ (「まっとうな」「正真正銘の」の意)

これらを勘案すると次のようにまとめることができる。

① 冠詞なしの〈être N〉は、主語が N という属性を持つとだけ述べる。次のような対話で用いられると考えられる。このとき N は形容詞と変わらない。

a. *Qu'est-ce que vous faites dans la vie ? — Je suis musicien.*

「ご職業は何ですか」「ミュージシャンです」

② 〈être un N〉は主語が確かに N の集合に帰属しており、N が持つとされる属性を完全に有していることを表す。次のような発話で用いられると考えられる。

b. *Paul a la tête dans les nuages ; l'argent ne compte pas pour lui.*

— *Tu sais, Paul est un artiste.*

「ポールは浮き世離れしているし、お金にまったく興味がないんだ」

「だって、ポールはアーティストなんだよ」

5.3. 不定名詞句主語と述語の問題

不定名詞句 *un N / des N / du N* が直接目的補語のときは特に制約なく用いることができる。

a. *Je vais faire une tarte aux pommes.* 私はリンゴのタルトを作る。

b. *J'ai rencontré des agents de police dans la rue.* 私は道で警官に出会った。

c. *Elle boit de l'eau minérale à table.* 彼女は食事のときはミネラルウォーターを飲む

ただし、好き嫌いを表す動詞の直接目的補語には、可算名詞は複数形、非可算名詞は単数形に定冠詞が付いたものを用いる（直接目的補語は総称名詞句）。

d. *J'aime les films d'amour.* 私は恋愛ものの映画が好きだ。

e. *Elle déteste le whisky.* 彼女はウィスキーが大嫌いだ。

このとき **un N / des N / du N** は使えない。

f. **J'aime des fraises.* 私はイチゴが好きだ。

g. **Elle adore du cognac.* 彼女はコニャックが大好きだ。

ところが **un N / des N / du N** を主語として用いるときには、時として容認度の低い文になることがある。

h. **Un homme est grand dans le groupe.*

グループの中で一人の男が背が高い。

i. **Des hommes sont grands dans le groupe.*

グループの中で何人かの男が背が高い。

j. *?Un homme mange à la dernière table.*

いちばん後ろのテーブルで男が一人食事している。

k. **Des hommes mangent à la dernière table.*

いちばん後ろのテーブルで男が何人か食事している。

(h.~k.は Léard, Jean-Marcel, *Les gallicismes*, Duculot, 1992 より)

また朝倉文法事典には次のように書かれている。

「〈**des** + 名詞〉が主語になることはまれ : *Des larmes vinrent dans ses yeux.*

(CAYROL, *Mot*, 32) 彼の目に涙が浮かんた」

なぜ **des N / du N** は主語になりにくく、**un N** も容認度が低いことがあるのだろうか。
(1) 〈**du N**〉はとりわけ主語になりにくい。

Rappelons, à la suite de D. Van de Velde, à laquelle j'emprunte les exemples qui suivent, que le partitif est incapable de constituer un nom non comptable en sujet agentif, ce qui explique qu'on ne trouve guère de séquences *partitif + nom* comme sujet de verbes véritablement intransitifs ou inergatifs (**Du blé a pourri sur pied / *De la glace est en train de fondre*) ou comme sujet ou complément d'agent de verbes transitifs passivables (**Du brouillard gêne la circulation / *La circulation est gênée par du brouillard*). La faiblesse référentielle du partitif est plus grande encore que celle de l'indéfini non partitif : celui-ci, on le sait, est seulement exclu avec les prédicats de propriétés : **Un enfant est blond / *Un enfant aime le chocolat* (avec référence à un particulier).

(Flaux, Nelly, « Les déterminants et le nombre », Flaux, Nelly et als. (eds), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université, 1997)

私が以下の例を借りたファン・デ・フェルデが述べたように、部分冠詞の付いた非可算名詞は、動作主的な主語になることができない。このために〈部分冠詞 + 名詞〉が自動詞や非能格動詞の主語として用いられているのを見かけることはほとんどない (**小麦が立ち枯れした / *氷が溶けているところだ*)。また〈部分冠詞 + 名詞〉が受動化できる他動詞の主語や動作主補語になることもめったにない (**霧で交通が混乱している / *交通が霧で混乱させられている*)。部分冠詞付き名詞の指示力は、不定冠詞付き名詞よりもさらに弱いのである。よく知られているように、不定冠詞付き名詞が使えないのは属性を表す述語だけである。**子供が一人金髪だ / *子供が一人チョコレートが好きだ* (*un enfant* は特定の個人を指す)。

N.B. 上の文章で著者が *verbes inergatifs* 「非能格動詞」と呼んでいる *pourrir, fondre* などは、現在では *verbes inaccusatifs* 「非対格動詞」と呼ばれている。

(2) 主語のほとんどは定名詞句である。

T. Givón (1978) par exemple observe qu'en position sujet, la proportion d'occurrences des SN définis par rapport aux indéfinis dépasse 90%. A quoi il faut ajouter les nombreuses observations relatives à la difficulté de construire des phrases françaises parfaitement acceptables avec un sujet précédé de l'article indéfini.

(Galmiche, Michel, « Rérérence indéfinie, événements, propriétés et pertinence », Jean David et Georges Kleiber (eds) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Klincksieck, 1986)

cf. Givón, Talmy, "Negation in language : pragmatics, function, ontology", Peter Cole (ed.) *Syntax & Semantics* 9, Academic Press, 1978.

たとえば Givón (1978) は主語位置での定名詞句の出現率は、不定名詞句と較べた場合 90% を越えると報告している。また不定冠詞付きの主語を持つ完全に容認可能なフランス語の文を作ることは難しいという数多い指摘もこれに付け加えなくてはならない。

【解説】

文の主語は *Le professeur nous a donné beaucoup de devoirs*. 「先生は僕たちに宿題をたくさん出した」のような定名詞句か、*Elle portait un chapeau rouge*. 「彼女は赤い帽子をかぶっていた」のような定代名詞が圧倒的に多い。その理由は、フランス語では主語は無標の主題 (*thème / topic non marqué*) だからである。主題は *ce dont on parle* 「話題になっているもの」であり、話し手・聞き手が知っているものか、たやすくアクセスできるものでなくてはならない。不定名詞句はふつう新情報を表すので、話し手と聞き手でまだ共有されていない。このため不定名詞句は有標の主題 (*thème / topic marqué*) になることができない。(左方転位された名詞句は有標の主題である)

i) **Un homme, il est venu*. (一人の) 男はやって来た。

ii) **Des enfants, ils jouent dans la cour*. (何人かの) 子供たちは校庭で遊んでいる。

iii) **De la fumée, elle flotte dans l'air*. (いくらかの) 煙は空中に漂っている。

有標の主題ほど制約は強くないが、主語にもやはり同じ制約があるので不定名詞句は主語になりにくいのである。一方、定名詞句は問題なく主題になることができる。

iv) *Le voleur, il a filé par la porte de derrière*. 泥棒は裏口から逃げた。

上の引用 (1) の *Flaux* の文章ではそれを指示力のちがいと見なしている。指示力とは、〈限定詞＋名詞〉が聞き手に特定の指示対象にアクセスできるようにする力である。指示力の強さは次のような順番だと考えられる。

《指示力のハイエラキー》

固有名詞 > 定代名詞 (*il, elle*) > *le N* > *un N* > *des N* > *du N*

ただし、主語名詞句の指示力だけで文の容認度が決まるわけではない。文の述語が大きな役割を果たしている。それを指摘したのは Kleiber である。

(3) 不定名詞句の特定解釈と非特定解釈

Kleiber の言うことを理解するための予備知識として、不定名詞句には特定解釈と非特定解釈があることを知っておこう。

① 特定解釈の不定名詞句 (*indéfini spécifique*)

a. *Jean a acheté un vélo*. ジャンは自転車を買った。

この文では動詞は過去形なので、すでに起きた出来事を表す。このときジャンが買った自転車はひとつに決まる。これが特定解釈である。

② 非特定解釈の不定名詞句 (*indéfini non spécifique*)

b. *Jean veut acheter un vélo.* ジャンは自転車を買いたがっている。

この *un vélo* にはふたつの解釈がある。ひとつはジャンが買いたがっている自転車はもう決まっているという解釈で、これは特定解釈になる。特定解釈の不定名詞句は定代名詞 (*il, elle / le, la*)で受けることができる。

c. *Jean veut acheter un vélo. Il va l'acheter demain.*

ジャンは自転車を買いたがっている。彼はその自転車を明日買うつもりだ。

もうひとつはジャンはどれでもいいから自転車を買いたいと考えているという解釈で、これを非特定解釈という。非特定解釈の不定名詞句は不定代名詞 *en* で受ける(非特定解釈の主語名詞句を受取る代名詞はない)。

d. *Jean veut acheter un vélo. Il va en acheter un demain.*

ジャンは自転車を買いたがっている。彼は(どれか一台)明日買うつもりだ。

非特定解釈は法助動詞の *vouloir, devoir, pouvoir* などの作るモーダル環境か、*chercher, être en quête de...* など「探す」という意味を持つ内包動詞の目的語に生じる。

e. *Pierre cherche une infirmière.* ピエールは看護師を探している。

(4) *prédicat spécifiant* 特定化述語 / *prédicat non spécifiant* 非特定化述語

Kleiber は次のように不定名詞句主語で問題なく容認される文について、以下のように述べている。(例 (3) (4) (7) (9)は省略)

(1) *Un avion s'est écrasé hier dans les Vosges.*

飛行機がヴォージュ山脈に墜落した。

(2) *Des inconnus ont cambriolé la maison de Léa.*

知らない人がレアの家空き巣に入った。

(5) *Trois voitures se sont tamponnées hier sur l'autoroute.*

高速道路で3台の車が玉突き衝突した。

(6) *Du givre hérissait le pourtour de sa bouche.*

彼の口のまわりに霜が付いて逆立っていた。

(8) *Beaucoup de neige est tombée sur les Vosges ce week-end.*

先週末にヴォージュ山脈にたくさん雪が降った。

Le point important du point de vue interprétatif est que la spécificité des SN, en somme leur statut de SN spécifique, provient des prédicats que nous avons appelé pour cette raison *spécifiants* (1981a et 1981b). De tels prédicats, essentiellement événementiels, comportent des points d'ancrage spacio-temporels ou *points de référence* qui font que les actants ou arguments qu'ils impliquent se trouvent également spécifiés. Ils se rapprochent, mais sans s'y assimiler, des *stage-level predicates* (ou prédicats *épisodiques*) de Carlson (1982). (...) Quoi qu'il en soit, le point à retenir est que, si dans (1)-(9) les SN indéfinis ont une interprétation spécifique, c'est bien parce que le prédicat leur assure cette spécificité. (...)

意味解釈という点から重要なのは、名詞句の特定性、つまり特定名詞句としての資格は、私がこの理由のために「特定化述語」と呼んだ述語に由来するということである。このような述語の大部分は出来事を表す述語で、対象が時空間に占める位置を定める定位点を持っている。言い換えるならば、それは述語の参与項が出来事と同時に特定化される参照点である。

特定化述語はカールソン (1982) の言う「局面レベル述語」(あるいはエピソード述語) に近いが、完全に一致するわけではない。(…) ともかく重要なのは、(1)-(9)の例文の不定名詞句が特定解釈されるのは、述語が特定性を与えてからだということである。

【解説】

Kleiber の言う「特定化述語」(*prédicats spécifiants*) とは、時間軸と空間軸のある1点に起きる出来事を表す述語である。たとえば *Un avion s'est écrasé hier dans les Vosges.* の *s'écraser* 「墜落する」だと、飛行機はある瞬間にどこかの場所に墜落する。逆に言うと文の述語が *s'écraser* という特定化述語である場合、その出来事に含まれる飛行機は特定の一機に決まる。つまり「墜落する」という出来事が、主語の不定名詞句の特定解釈を導くと考えるのである。

(5) (...) si le prédicat est *non spécifique*, la lecture existentielle ne peut s'établir, puisque les SN indéfinis ne reçoivent plus du prédicat les points de référence nécessaires à un ancrage spécifique. Cela signifie que, si l'on change les prédicats spécifiants de (1)-(10) par des prédicats de propriétés (soit des propriétés stables ou *individual-level predicates* chez Carlson, mais soit aussi les propriétés seulement transitoires ou épisodique), alors les énoncés (1)-(10) donnent lieu à des combinaisons mal formées en interprétation existentielle.

- (13) a. ?Un avion est gris.
 b. ?Des inconnus sont étonnés.
 c. ?Du givre était glacé.
 d. ?Beaucoup de neige est molle.
 e. ?Aucun avion n'est gris.

もし述語が非特定のだと、(不定名詞句の) 存在解釈 [=特定解釈] は得られない。不定名詞句が述語から特定化するための投錨に必要な参照点をもらうことがないからである。このため (1)-(10)の特定化述語を属性を表す述語に変えると(時間的に安定した属性を表すカールソンの言う個体レベル述語であれ、一時的でエピソード的な述語であれ) (1)-(10)の発話は存在解釈を得ることのできない不適格な組み合わせになるのである。

- (13) a. ?飛行機が一機灰色だ。
 b. ?知らない人たちが驚いている。
 c. ?霜が凍っている。
 d. ?たくさんの雪が柔らかい。
 e. ?どの飛行機も灰色でない。

【解説】

非特定の述語とは、*être gris* 「灰色である」、*être mou* 「柔らかい」のように、出来事ではなく属性を表す述語である。*Son sac est gris.* 「彼のかばんは灰色だ」を例にとると、かばんの色が一晩で変わることはないの、色は時間的に安定している。また彼のかばんはどこに持って行っても灰色である。つまり *être gris* は時間と空間に関係なく成り立つ属性なので、特定の時空間を指定しない。このため述語として用いられたときに、主語の不定名詞句 (*ex. un avion*) を特定のひとつに決めるのに必要な時空間的な絞り込みができない。このため主語の不定名詞句は特定解釈されず、結果として文は容認度の低いものになる。

(6) Bosveld-de Smet (2000) は Kleiber の考えを発展させて、よりきめ細かい述語の区別を提案している。

Kleiber (1981a)	spécifiant		non-spécifiant	
Carlson (1978)	stage-level			individual-level
Verkyul (1993)	non-statifs	statifs		
	A	B	C	D

Kleiber, Georges (1981a) “Relatives spécifiantes et relatives non-spécifiantes”, *Le Français moderne* 49.

Carlson, Gregory (1978), *Reference to Kinds in English*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst, published by Garland.

Verkyul, H. (1993) *A Theory of Aspectuality*, Cambridge University Press.

(A) 狭い意味での出来事述語のクラス。どこかの場所に特定され、また時間的にも短く持続しない出来事を表す。

ex. aboyer, arriver, courir, crier, se battre, s'écrouler, échapper, ouvrir, mastiquer, etc.

(B) 状態述語だが、空間的に決まった場所について成り立ち、また持続時間も短い。

ex. traîner par terre, obstruer le couloir, dormir sur le tapis, être répandu sur la table, être disponible dans l'autocar, attendre devant la porte, etc.

(C) 時間的に限定されないか、あるいは空間的に限定されない状態述語。

ex. sourire, dormir, avoir faim, être en vente, être en retard, être perceptible, être en colère, etc.

(D) 恒常的・習慣的に成り立ち、特定の空間に限定されない。

ex. aimer la musique, être un mammifère, être blond, être intelligent, fournir du sucre se dissoudre dans l'eau ; (習慣的に) fumer

この分類のうち、(A) (B)は Kleiber の *prédicats spécifiants* に当たるので、主語の不定名詞句に存在解釈を得ることができる。

a. *Un taxi arrive.* / *Des chiens sont en train de se battre.*

タクシーが一台来た / 犬がけんかしている。

b. *Un chat dort sur le sofa.* / *Des documents traînent sur le tapis.*

ネコがソファで寝ている / 絨毯に書類が散らばっている。

しかし (C) は **un N** で容認度が低くなることがあり、**des N / du N** 主語を容認しない。

c. **Des enfants dorment déjà.* 子供たちが (何人か) もう寝ている。

d. **Des appareils sont en panne.* 電話機が (いくつか) 故障だ。

e. **Du linge séchait toujours.* 洗濯物がまだ干してある。

f. **Du poulet est encore gelé.* 鶏肉がまだ凍っている。

そして (D) は不定名詞句の主語をまったく許容しない。

g. **Un étudiant est intelligent.* 学生が一人頭がいい。

h. **Du sucre se dissout dans l'eau.* (少しの) 砂糖は水に溶ける。

(Bosveld-de Smet, Léonie, “Les syntagmes nominaux en *DES* et *DU* : un couple curieux parmi les indéfinis”, Bosveld-de Smet, Léonie et als. (eds), *De l'interprétation à la quantification : les indéfinis*, Artois Presses Université, 2000)

6. 総称文と冠詞

たとえば特定の犬や猫ではなく、この世にいる犬全部、猫という類 (*genre*) について何かを述べる文を総称文 (*phrases génériques*) という。*générique* とは「*genre* につい

での」という意味である。総称文にはいろいろと謎があり、いまだに言語学では議論が続いている。ここでは総称文に用いられる冠詞という面から見ておこう。

(1) フランス語の総称文の冠詞として用いられるのは次のとおりである。

【可算名詞】

a. 不定冠詞単数形

Une train peut en cacher un autre.

列車の陰にはもう一両の列車が隠れていることがある。[フランス SNCF の掲示]

b. 定冠詞単数形

L'avion va plus vite que le train. 飛行機は列車より速い。

c. 定冠詞複数形

Les lions vivent en Afrique. ライオンはアフリカに生息している。

【非可算名詞】

定冠詞単数形

Le vin rouge est bon pour la santé. 赤ワインは健康によい。

フランス語で可算名詞にいちばんよく用いられるのは **les N** である。

(2) 英語では総称文の冠詞は次のようになる。

【可算名詞】

a. 不定冠詞単数形

A horse is a useful animal. 馬は役に立つ動物だ。

b. 定冠詞単数形

The whale is a mammal. 鯨は哺乳動物だ。

c. 無冠詞複数形

Polar bears are becoming extinct. 北極熊は絶滅しかけている。

【非可算名詞】

無冠詞単数形

Gold is a precious metal. 金は貴金属だ。

英語で可算名詞にいちばんよく用いられるのは無冠詞複数形 (bare plural) である。

(3) **un N, le N, les N** のちがいについて朝倉文法事典には次のように書かれている。

a. 総称の不定冠詞

不特定な一個体が同種属の他のすべての個体を代表することがある。

Un homme ne pleure pas. (Green, *Moïra*, 82)

男は泣くものじゃない。

Un officier n'a qu'une parole. (Clair, 305)

武士に二言なしだ。

この用法は **un, une** に限られ、その複数は **des** ではなく **les** である。

Un livre est un ami de tous les instants.

書物は不断の友である。

> *Les livres sont des amis de tous les instants.*

単数で表し得ない次例はこの限りではない。

Des frères qui s'aiment mettent tout en commun. (Renard, *Poïl, la Carabine*)

愛しあっている兄弟は何でも共有するものだ。

b. 総称の意味を表す定冠詞

単数定冠詞は抽象的に考えた種 (*espèce*) の名称を、複数定冠詞は種を構成する各個体 (*individu*) の総和を表す。例えば *une table, des tables* は机と名づけられるもの (*individu*) の任意の 1 個・数個を表すのに対し、*les tables* はこれら個々の机の総和であり、*la table* は個々の机の個別性を度外視してその共通の属性のみを考えた抽象的概念である。

総称単数に用いがたい名詞。構成分子間の差異が大きいもの。動植物の類・科の名称など : *les animaux / les végétaux / les insectes / les mammifères, etc.*

ただし、これらに対立的に表すときは総称単数も可能。

L'homme contre l'animal (« *Que sait-je ?* » 叢書の書名)

人間対動物

(4) 総称文に使える冠詞の中で、いちばん制約が強いのは **un N** である。次の a.~c. は適格な文だが、d.~f. は容認度が低い。

a. *Un carré a quatre côtés.* 正方形には辺が 4 つある。

(Corblin, Francis, *Indéfini, défini et démonstratif*, Droz, 1987)

b. *Une société repose sur des principes.* (Ibid.)

社会は原理原則に基づいて成り立っている。

c. *Un chat est digitigrade.* ネコは指行性である。

d. ?*Un vélo est utile.* 自転車は便利だ。

(藤田知子「un N générique について」『フランス語学研究』19, 1985)

e. ?*Un singe est amusant.* サルはおもしろい。

(Kleiber, Georges. *Problèmes de référence : descriptions définies et noms propres*, Klincksieck, 1981)

f. ?*Un bouquet fait plaisir.* (A. Culioli, *Séminaire de D.E.A.*)

花束は喜ばれる。

Lawler (1973) は次の例をもとに、英語の **a N** 総称は述語が「多声的である」のように主語の本質的な属性を表すときは容認度が高く、「人気がある」のような主観的属性を表すときは容認度が低いとした。

g. *A madrigal is polyphonic.* マドリガルは多声的だ。

h. ?*A madrigal is popular.* マドリガルは人気がある。

(Lawler, J. *Studies in English Generics*, University of Michigan Papers in Linguistics 1, 1973)

確かに上の例 a.~c. の述語は主語の本質的な属性を表しており、d.~f. の述語は主観的な属性を表している。ただし次のようにすると d.~f. の容認度は改善される。

i. *Un vélo est utile à la campagne.* (藤田, *op. cit.*)

自転車は田舎では便利だ。

j. *Un bouquet fait toujours plaisir.* (Culioli, *op. cit.*)

花束はいつでも喜ばれる。

また次の例では述語は主語の本質的な属性を表しているとは言えないが適格である。

k. *Un Ecossais ne refuse jamais de boire.* (Coblin 1987)

スコットランド人は決して酒を断らない。

1. *Un homme est souvent mécontent de son sort.* (Ibid.)

人間というのは自分の運命に不満なことがよくある。

どうやら *à la campagne* のように状況を限定したり, *toujours, souvent* のような時間副詞を付け加えると **un N** 総称の容認度が改善されるようだ。

N.B. 総称文の可否については、その文が成り立つ解釈領域が関係しているようだ。つまり世界全体で成り立つのか、それとも田舎だけで成り立つのかという領域の広さのちがいである。Martin は次の論文でそのことに少し触れているが、詳しいことはまだよくわからない。

Martin, Robert, “Les usages génériques de l’article et la pluralité”, Jean David & Georges Kleiber (eds) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Klincksieck, 1986.

(5) **un N** 総称にはモーダルな意味が伴う

un N 総称についてもう一つ注意しなくてはならないのは、「～するものだ」「～してはならない」などの規範的な意味が伴うことである。**le N / les N** 総称にはこのような意味は見られない。

a. *Un garçon ne pleure pas.*

男の子は泣くものじゃない。

b. *Une jeune fille bien élevée évite de tels propos.*

躰のよい女の子はそのような話題は避けるものだ。

(6) **le N** 総称と **les N** 総称にもまたちがいがある。

【証言 1】

宮沢賢治『オッペルと象』を大賀正喜と Gabriel Mehrenberger がそれぞれフランス語に訳し、訳文を比較している。

[原文]「どういうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう」

[大賀訳]

Tu aimerais savoir pourquoi il est venu ? Eh bien, peut-être qu’il est venu en sortant du bois sans raison particulière, puisqu’il s’agissait d’un éléphant.

[Mehrenberger 訳]

Tu me demandes pourquoi il s’est amené là ? Tu sais, moi, *les éléphants*... Peut-être bien qu’il est sorti de sa forêt, comme ça, en flânant, pour rien.

大 これは *les éléphants* と、*les* になるのがポイントですね。(…)
「あんなものは」ということですね。つまり、総称がくる。

——ここを Tu sais, moi, l’éléphant... とはできませんか。

M 単数にするとたとえば、*L’éléphant a de grandes oreilles.* のように学術的な、zoologique なことばになるわけです。ここは必ず複数、*les éléphants* になります。

大 この問題はね、*j’aime* の後に何がくるか、考えればいいんです。*J’aime les éléphants. J’aime le café.* でしょう。それに対して *l’éléphant* は、*musée de l’homme* の *l’homme* 「人類」と同じだと考えればいいわけです。

(大賀正喜、G. メランベルジェ『和文仏訳のサスペンス』白水社、1987)

【証言2】

(1) **A tiger is a dangerous animal.**

を読むとき浮かんでくる映画は、一頭の虎が（世界のすべての虎を代表して）怖い目をしてジャングルから現れて来る。それは、不定冠詞の“a tiger”は、世界に数多くいる虎（複数）の中の一頭という意味であるからである。具体的にどの一頭であるかは、不定冠詞だから、そのアイデンティティまでは決まっていなくても、一応皆の代表となる一頭である。

(2) **The tiger is a dangerous animal.**

を読むとき浮かんでくる映画は、野生動物の図鑑のページを繰っていくと、虎の挿絵があって、その下に説明がついている、というものである。“the tiger”という定冠詞で一般を表す表現は、改まった感じで、書き言葉ぽくて、講義や説教などに頻繁に使われるので、学習百科図鑑の挿絵のキャプションにはぴったり合う。日常会話には、少々硬いと考えてよい。

(3) **Tigers are dangerous animals.**

を読むとき浮かんでくる映画は、何頭かの虎が怖い目をしてジャングルから現れて来る。(…)原則として、複数形で一般を表す表現は、もともと日常会話的と考えてよい。つまり、改まった感じの“the tiger is”や、不定冠詞の“a tiger is”よりも、“Tigers are dangerous animals.”の方がよっぽど日常的なフィーリングをもっているのである。

(マーク・ピーターセン『続 日本人の英語』岩波新書、1990)

(7) 実例(1)

幼児向けの雑誌で一匹のウサギの写真に解説が添えられている。

C'est un petit lapin sauvage qui a un joli pelage gris-brun sur le dos et tout blanc sur le ventre. Il a un petit bout de nez qui bouge sans arrêt. Il a deux petites pattes devant pour creuser la terre et deux grandes pattes derrière pour courir et faire des bonds.

Les lapins aiment bien jouer ensemble, le soir, quand tout est calme. C'est l'heure où ils sortent de leur cachette pour gambader et pour se nourrir. (Youpi, No. 12, 1989)

これは野生のウサギです。背中のは茶色がかった灰色で、おなかの毛はまっ白です。たえずひくひく動いている小さな鼻を持っています。2本のちいさな前脚で土を掘り、大きな2本の後脚で走ったり、ぴよんと飛び跳ねます。

ウサギはあたりが静かになった夕方にいっしょに遊ぶのが好きです。その時間には巣穴から外に出て、飛び跳ねたり食事をします。

(8) 実例(2) 同じ幼児向けの雑誌記事から

Le lion est un animal sauvage, très fort et très féroce : on dit que c'est une fauve. Sa tête est énorme. Elle est entourée d'une crinière qui le protège des coups de dents quand il se bat avec d'autres lions. (...) Les lions vivent en Afrique dans la savane immense et plate. Là-bas, il fait très chaud et il n'y a pas beaucoup d'arbres. Les lions aiment bien être en famille. Comme ils sont assez paresseux, ils se couchent les uns contre les autres et ils somnolent pendant des heures. (Youpi, No. 13, 1989)

ライオンはとても強くて獰猛な野生の動物です。猛獣と呼ばれています。とても大きな頭をしています。頭にはたてがみがあって、他のライオンと闘うときに牙の攻撃から頭を護ってくれます。(…)ライオンはアフリカの広くて平らなサバンナに住んでいます。そこはとても暑くて、あまり木がありません。ライオンは家族で過ごすことが好きです。かなり怠け者なので、お互いにもたれあって何時間も居眠りします。

(9) 実例 (3)

L'Allemand, habitué à l'objectivité et à l'ordre, déplore souvent en France l'absence de l'un et de l'autre. Il s'imagine que *les Français*, eux aussi, doivent en souffrir. Mais comme ce n'est pas le cas, *l'Allemand* trouve alors dans cet état de choses un second motif d'étonnement, — quand il ne s'en irrite pas. *Le Français* sait qu'en fin de compte, les choses iront bien « quand même », qu'on s'en tirera « malgré tout ». *Il* préfère se tranquilliser avec ce « quand même » et ce « malgré tout » plutôt que de s'imposer une discipline et un ordre auxquels les dispositions naturelles de ses compatriotes ne se soumettraient jamais.

(E.R.Curtius : *Essai sur la civilisation en France*)

ドイツ人は客観性と秩序に慣れていて、フランスにはそのどちらもないことをよく嘆く。ドイツ人はフランス人もそのことで困っているだろうと考える。ところが実際にはそんなことはないの、ドイツ人は二度びっくりすることになる。もっとも腹を立てなければの話だが。フランス人には、物事は「いずれにせよ」最終的にはうまく行き、「とにかく」問題は片付くことがわかっている。フランス人は自分たちの気質に決して合わない規律や決まりに従うよりは、この「いずれにせよ」や「とにかく」で心安らかに過ごすのを好むのである。

(10) *le N* 総称と *les N* 総称のちがいのいくつか

- a. i) *Les enfants aiment beaucoup les tableaux de Marie.*

子供たちはマリーの絵が大好きだ。

- ii) **L'enfant aime beaucoup les tableaux de Marie.*

(Martin, Robert, “Les usages génériques de l'article et la pluralité”, Jean David & Georges Kleiber (eds) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Klincksieck, 1986)

→ *aimer les tableaux de Marie* は「子供」の内包に含まれる本質的属性を表す述語ではない。たまたまそうなのである。*le N* は *N* の内包に含まれる本質的属性を表す述語しか許容しない。たとえば *Le chat est carnivore*. 「ネコは肉食である」では、*être carnivore* はネコの内包に含まれているので、*le N* が可能である。

- b. i) *Seuls les hommes sont chauves.*

人間だけが禿になる。

- ii) **Seul l'homme est chauve.* (Ibid.)

→ *les N* はゆるい総称なので例外を許容する。人間が全員禿げるわけではない。*le N* の述語は内包に含まれる属性なので、すべての成員に当てはまり例外を許容しない。

- c. i) *Les chats blancs sont chétifs.*

白い猫は病気にかかりやすい。

- ii) ? *Le chat blanc est chétif.*

- iii) *Le siamois est chétif.*

シヤム猫は病気にかかりやすい。

(Kleiber, Georges, “Comment traiter le générique ?”, *Travaux de linguistique* 19, 1989)

→ *le N* は分類学的・文化的に確立したカテゴリーしか指すことができない。*le siamois* 「シヤム猫」はネコの種として確立されたカテゴリーなので *le N* で指すことができる。しかし *le chat blanc* はそうではないため ii) は容認度が低い。*les N* は確立されたカテゴリーでなくても指すことができるので i) は OK。

(11) **des N / du N** は総称文の主語になれない？

一般に **des N / du N** は総称文の主語になれないとされている。

a. *Les baleines sont des mammifères.*

(すべての) クジラは哺乳動物である。

b. *?*Des baleines sont des mammifères.*

(何頭かの) クジラは哺乳動物である。

c. *Le bon vin ne se refuse pas.*

美味しいワインは断れないものだ。

d. *??Du bon vin ne se refuse pas.*

(いくらかの) 美味しいワインは断れないものだ。

(a.~d.は Muller, Claude, “A propos de l’indéfini générique”, Georges Kleiber (ed) *Rencontre(e) avec la généralité*, Klincksieck, 1987)

その理由は次のように考えられる。**les N** はゆるい総称ではあるが、N の集合の成員全部を指すことができる。クジラは例外なく哺乳動物なので a. は適格である。一方、**des N** は N の集合の部分指す。このため b. ではクジラの一部だけが哺乳動物だという正しくない意味を表してしまう。**le N** と **du N** についても同じである。

しかし **des N** 主語の総称文は例外的ながら可能であることが確認されている。

e. *Des diplomates doivent être discrets.*

外交官は口が堅くなくてはいけない。

f. *Des rosiers qu’on ne taille pas ne donnent pas de belles fleurs.*

剪定しないバラの木はきれいな花が咲かない。

g. *Des gendarmes peuvent confisquer une voiture.*

警官は自動車を押収することができる。

詳しいことは次の文献を参照のこと。

Attal, Pierre, « A propos de l’indéfini “des” : problèmes de représentation sémantique », *Le Français moderne* 2, 1976.

Carlier, Anne, « Généralité du syntagme nominal sujet et modalités », *Travaux de linguistique* 19, 1989.

森香奈絵、東郷雄二「des N 主語を持つ総称文と状況量化」『フランス語学研究』No. 38, 2004.

7. 定冠詞の用法

7.1. 朝倉文法事典（伝統文法）

(1) 指示詞として（語源的意味）

① 成句

pour le moment 今のところ / *de la sorte* そんなふうに / *à l’époque* その当時
手紙の日付 *Paris, le 2 mai* ▶上例の定冠詞は指示形容詞に相当する。

la saint Jean (=celle [la fête] de saint Jean) 聖ヨハネ祭 / *la Noël* (=celle [la fête] de Noël) クリスマス ▶これらは定冠詞が代名詞的に用いられた古語法の名残り。

② 感嘆文

定冠詞は *quel* に近い意味を持つ。*Le brave homme !* 何といういい人だろう。/*Oh ! la bonne idée !* ほう、それは名案だ。

③ 呼びかけ (俗語的)

Hé ! l'homme, venez ici ! おーい、その人、こっちへ来なさい。

④ 形容詞、または形容詞的に用いられた名詞の前で *celui* の意

Des deux sœurs, j'aime mieux la jeune. 2人の姉妹のうち僕は妹のほうが好きだ。

(2) 特定の用法

発生以来の機能。特定とは、ある事物について喚起する観念が同種の他の事物に適応されないこと、言い換えれば、ある事物が「唯一物であること」(松原『冠詞』, 14)を言う。(…) 定冠詞は、話者と聴者とがある事物が特定のものであることを知っている場合、あるいは話者が特に特定であることを強調する場合に用いられる。

① 既出の語を受ける

Un homme et une petite fille viennent d'entrer. Alisa regarde l'homme. (Duras, *Détruire*, 31) 男と少女が入ってきたところだ。Aは男を眺める。

N. B. いわゆる定名詞句の「忠実照応」(anaphore fidèle)である。しかし **le N** は直前の名詞句を受けにくい場合があることが知られている。

i) *J'ai rencontré un ami. ?L'ami...* 私はある友人に出会った。友人は...

ii) *Une femme entra dans la pièce. J'avais vu { cette / *la } femme chez mon ami.*

女性が一人部屋に入って来た。私はその女性を友人宅で見かけたことがあった。

詳しくは次の文献を参照のこと。

井元秀剛「**le N** と **ce N** による忠実照応」『フランス語学研究』23, 1989.

小田涼「定名詞句 **le N** と指示形容詞句 **ce N** による照応のメカニズム」『フランス語学研究』No. 42, 2008.

② 別語による反復

N'avait-il pas une sœur ? On me précisa que la jeune fille était employée dans des champs de mil. (Tourmier, *Gaspard*, 15) 彼には妹がいたのではないか？ 娘はキビ畑に雇われているとのことだった。

N.B. いわゆる定名詞句の「非忠実照応」(anaphore infidèle)である。この場合、**le N** は先行する名詞句の上位語 (superordonné) でなくてはならないとされている。ex. *un chien* → *l'animal* ただし共有知識に基づく *van Gogh* → *le peintre* や、ののしり語 *Pierre* → *l'imbécile* の場合はその限りではない。

③ 先行詞なしで特定の強調

La voiture avait traversé le village. (Meersch の小説 *L'Empreinte de Dieu* の冒頭)

車はもう村を通過していた。▶ 作者は定冠詞によって、車は主人公が乗っている車であり、村は主人公がめざした村であることを示す。

N.B. これは作者と読者の共犯関係に基づいて、指示対象 (*la voiture*) が最初から存在していたかのように描き、読者を作品世界に引き込む技法である。

④ 先行の記述による特定化

Devant lui, un rocher pareil à un long mur s'abaissait, en surplombant un précipice ; et à

l'extrémité, deux boucs sauvages regardaient l'abîme. (Flaubert, St. Julien 1)

彼の前には、長い城壁にも似た岩が絶壁の上にのしかかって垂れていた。その先端に野生の山羊が2匹深淵を見おろしていた。▶岩の「先端」、絶壁の「深淵」であることは容易に察知できる。

N.B. これはいわゆる連想照応 (anaphore associative) のこと。un rocher と l'extrémité は「全体・部分」の関係にあり、un précipice と l'abîme は縁語関係にある。

⑤ 状況による特定化

Passez-moi le plat. その皿を取ってください。/ *C'est un œuf du jour.* 今日産んだ卵です。
Portez cette lettre à la poste. この手紙を郵便局に持って行ってください。/ *Revenons à la maison.* 家に帰ろう。

N.B. このうち *Passez-moi le plat.* や *Fermez la porte.* は、定冠詞の「現場指示的用法」と呼ばれることが多い。しかしこれが単純な現場指示でないことは次の文献を参照。東郷雄二「定名詞句の『現場指示的用法』について」『京都大学総合人間学部紀要』No. 8, 2001.

⑥ 一般的知識による特定化

唯一物定冠詞 (*le soleil, la lune, la terre, le paradis, l'enfer* など)、*la Vierge* 聖母マリア、*la Pucelle* (=Jeanne d'Arc), *le Sauveur* 救世主、などは一般的知識が予想される限り定冠詞を用いる。これらの名詞は③のように制約を受けず、絶対的に特定のもの。固有名詞 (*la France, l'Europe, la Seine, le Corse* など) の前の定冠詞も同じ。

◆誇張的用法。万人周知のものであることの強調 (*le = ce fameux*)

(1) メニューに記す料理名 : *le brochet de Moselle* モゼル河産のカワカマス

▶普通は無冠詞。冠詞の使用は snobisme による古い慣用の復活 (D, 252)

cf. Dauzat, Albert, *Grammaire raisonnée de la langue française*, 1947.

(2) 同格名詞 : *Lycurgue, le législateur de Sparte* かのスパルタの立法者リュクルゴス / *Louis XII, le père du peuple* 国民の父ルイ十二世

N.B. これはよく言われる「この世に1つしかないものには **le** を付ける」ということである。この場合、**le N** の唯一性は最初から保証されている。ただし、すでに見たように **N** の様々な側面を考えて「種類」の概念が介入すると不定冠詞になる。

i) *Grâce à ce court voyage, nous avons découvert une France inconnue.*

この短い旅行のおかげで、私たちは今まで知らなかったフランスを発見した。

⑦ 習慣的行為による特定化

Maman met la table. (= *la table qu'elle met pour chaque repas*) お母さんが食卓の用意をしている ◆表現的方法 : *J'ai toujours la faim.* (Vigny, *Chatt.* III. 2) 相変わらず腹が減っています。▶飢えが不断につきまとっていることの強調。

⑧ 所有の観念による特定化

J'ai mal à la tête. / *Elle a les cheveux noirs.*

N.B. これは人体の一部を表すときに用いる定冠詞のこと。

⑨ 補語名詞、補足節による特定化

(1) **de** + 名詞 : *le couvercle d'une casserole* 鍋の蓋

de + 不定詞 : *demandez la permission de ...* …の許しを請う

N.B. ただし次の点に注意が必要である。

- (i) 特定化されるのは「鍋の蓋」のように1つに決まる場合に限られる。*une fenêtre de cette maison* 「この家の窓1つ」のように複数あるうちの1つを指すときには不定冠詞を使うこともある。
- (ii) *un maillot de bain* 「水着」、*un train de nuit* 「夜行列車」のように、**de** に続く名詞が無冠詞で、複合名詞となるときも定冠詞にはならない。
- (iii) *Il a épousé la fille d'un paysan.* 「彼は農夫の娘と結婚した」のような場合は、その農夫に娘が一人しかいないとは限らない。

詳しいことは次の文献を参照のこと。

Flaux, Nelly, « Le SN le fils d'un paysan : référence définie ou indéfinie ? », *Le Français moderne* 60, 1992.

Flaux, Nelly, « Le SN le fils d'un paysan : référence définie ou indéfinie ? » (2^e partie), *Le Français moderne* 61, 1993.

小田涼「フランス語の属格をともなう定名詞句の唯一性について」『日本言語学会第131回大会予稿集』、2005.

小田涼「*La fille d'un fermier* 型の複合名詞句について — フレーム指示としての定冠詞」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) No. 88, 2006.

小田涼「*« La touche d'un piano »* 型または *« l'aile de l'avion »* 型の定名詞句の唯一性について」『年報・フランス研究』(関西学院大学フランス語フランス文学専修)、No. 40, 2006.

(2) 形容詞 : *l'étoile polaire* 北極星 / *la race humaine* 人類

N.B. どんな形容詞でも唯一性が得られるわけではない。*un homme gourmand* 「食いしん坊の男」に形容詞は付いているが唯一性はない。ふつう形容詞に名詞の外延を唯一にまで限定する力はない。*polaire* 「北極の」、*humain* 「人間の」のように、特定の指示物や種・類を指す形容詞に限られる現象なので注意が必要である。

(3) 同格 : *la reine Victoria* ヴィクトリア女王

(4) 関係節 : *le bateau qu'il a pris* 彼が乗った船 / *à l'âge que vous avez* あなたの年では ▶ 関係節によって唯一物化されなければ定冠詞は用いられない : *un livre qui est intéressant*

N.B. これはしばしば定冠詞の後方照応的用法 (cataphore) と呼ばれる。関係節だけでなく次のような補文にも見られる。

i) *Je ne peux pas me faire à l'idée qu'il m'a trahi.*

私は彼が裏切ったという考えに馴染めない。

関係節によって後ろから限定されているので先行詞は定冠詞になると説明されることが多いが、朝倉文法事典の注記にあるように、関係節が付いているからといって必ず先行詞に定冠詞が付くわけではない。次のように不定冠詞になることもある。

ii) *Un étudiant qui vient de Madrid est tombé amoureux de Nicole.*

マドリッド出身の学生がニコルに恋をした。

(5) 最上級

最上級の形容詞を伴う名詞はほとんど常に定冠詞をとる。「ある事物の中で最上級のもの1つしかないからである」(松原『冠詞』)。 : *C'est l'homme le plus heureux*

que je connaisse. 私が知っているうちで、一番幸福な人だ。

◆ただし、時に不定冠詞も見られる：*un ouvrier le plus habile du monde* (D.-P, II, 330-2 に類例 34) N. (V, 171) はこの不定冠詞に定冠詞の価値を認め、F (259)は *le plus = très* と考える。

cf. D.-P = Damourette, S. & E. Pichon, *Des mots à la pensée. Essais de grammaire de la langue française*, 1930-47. / N. = Nyrop, Kr., *Grammaire historique de la langue française*, 1899-1930.

(6) 序列

ある物がある系列の中で占める順序を定める語を添える場合：*le vingtième siècle*
20 世紀

N.B. ただし次のような場合は不定冠詞が付く。

i) *Je voudrais vous poser une deuxième question.*

二番目の質問をしたいと思います。

ii) *J'ai une dernière question.*

最後の質問があります。

項目が全部でいくつあるか決まっていて、そのうちの二番目というときは定冠詞が付く。しかしまだ項目がいくつあるか決まっていないときは不定冠詞を用いる。

(7) 比較による同一

Il habite la même ville que vous. 彼はあなたと同じ町に住んでいる。

(3) 総称的用法 (まとめ)

La baleine est un mammifère. 「クジラは哺乳動物である」のような総称文については別項で扱ったので省略する。総称文と総称名詞を区別しなくてはならない。朝倉文法事典では次のようなものを総称名詞として扱っている。

a. 科学・芸術を表す名詞

étudier la médecine / le droit 医学 / 法律を学ぶ

b. 楽器名

jouer du piano ピアノを弾く

c. 手段・道具

travailler à l'aiguille 針仕事をする / *pêcher à la ligne* 釣りをする

d. 用途を表す補語

la bouteille à l'encre インク瓶 / *la boîte aux lettres* 郵便ポスト

e. 乗り物

prendre le train / le bateau 列車 / バスに乗る ただし *prendre un taxi* タクシーに乗る

f. その他

prendre la parole 発言する / *perdre l'espoir* 希望を失う / *aller au bal* 舞踏会に行く

また朝倉文法事典では、総称用法のひとつとして「種属の典型」を表す用法を挙げている。

Ce n'est pas un poète, c'est le poète.

ただの詩人じゃない、本物の詩人だ。

英語では *typical the* と呼ばれている用法である。

He is quite the gentleman. 彼こそは全く真の紳士です。

N.B. 上に挙げられている *pêcher à la ligne* のような定冠詞の用法を、「総称」と見なすかどうかは議論の余地がある。総称を「N のクラスに属する成員のすべて」と考えるならば、*J'aime les cerises*. 「私はサクランボが好きだ」は確かに総称であるが、*pêcher à la ligne* はそうではない。『釣り糸』のクラスに属する成員のすべてを用いて釣りをするわけではないからである。この場合の *la ligne* はむしろ内包を指す用法と見なしたほうがよいとも考えられる。しかし、そうすると *une cuisinière à gaz* 「ガスレンジ」のような無冠詞の *gaz* が内包を指す用法とどう区別するかという別の問題が生じる。

7.2. 定と不定

ここまでの考察を踏まえて、さらに一步進めて定 (*défini*) と不定 (*indéfini*) とがどうちがうかを考えてみよう。その前提として冠詞が表す意味とはどのようなものかを見てみなくてはならない。

(4) 冠詞が表す意味は指令的 (*instructionnel*) である。

Pour caractériser le rôle que joue le déterminant dans la construction de la référence actuelle du GN (=groupe nominal), on dira qu'il a un 'sens instructionnel' : cela signifie qu'il donne au destinataire de l'énoncé des instructions sur la manière de construire, à partir du sens lexical du nom, le référent du GN. Ce terme de sens instructionnel vise à représenter le fait que la contribution du déterminant au sens d'un GN n'est pas de nature conceptuelle ; les informations qu'il apporte sur le sens du GN ne sont pas du même type que celles d'apporte le nom. (Gary-Prieur, Marie-Noëlle, *Les déterminants du français*, Éditions Ophrys, 2011)

名詞句の現働化された指示を達成するのに限定詞が果たす役割を言い表すために、限定詞は「指令的意味」を持つとすることにしよう。それは、発話の受け手にたいして、名詞の語彙的意味をもとにして名詞句の指示対象をどうやって構築するかについての指令を限定詞が与えるということである。この指令的意味という用語には、名詞句の意味を作り上げるに当たっての限定詞の役割が概念的な性質のものではないということ表現する意図がある。名詞句の意味に限定詞がもたらす情報は、名詞がもたらす情報とは同じタイプのものである。

【解説】

un や **le** のような冠詞が表している意味と、**chien** のような名詞が持っている意味とは性質が異なる。**chien** が持っているのは語彙的意味である。語彙的意味は概念的で、イメージを思い浮かべることができる（四つ足で、毛に被われていて、etc.）。一方、冠詞の意味は概念的ではないので、イメージを思い浮かべることができない。冠詞の意味は、名詞が表す概念的意味に当てはまる指示対象をどのようにして探せばよいかを聞き手に知らせることにある。「このように探せ」という手がかりを与えるという意味において、冠詞の意味は「指令的」なのである。このことは冠詞が「聞き手目当て」であることをよく示している。冠詞は話し手のためではなく、聞き手のためにある。

(5) その上で Gary-Prieur は不定冠詞に次の定義を与えている (Ibid.)

Définition :

un N pose l'existence, dans la situation du discours, d'un objet correspondant au sens de N [+Dénombrable]

un N は、談話状況に中に、可算名詞である N の意味に当てはまる事物の存在を述べる。(※部分冠詞 **du** の定義も同じで、最後が[-Dénombrable]となる)

【解説】

次の Gary-Pieur 自身の例を使って解説しよう。

a. Au milieu de la clairière, *une licorne* galopait gracieusement en direction du bois.

空き地のまん中で、一頭のユニコーンが森の方角へ優雅に走っていた。

un N が「一頭のユニコーンの存在を述べる」という点は説明不要である。重要なのは *dans la situation du discours* 「談話状況の中に」という部分である。ふつう意味論では *univers du discours* 「談話空間」という。例 a. ではそれは現実の世界ではなく、言葉によって作り出されたお話の世界である。談話空間は現実かフィクションかを区別しない。しかし例 a. では文頭の *au milieu de la clairière* 「(林間の) 空き地のまん中で」という場所句によって、談話空間がさらに限定されていることに注意しよう。それは意味論で *circumstances of evaluation* 「値踏み場」(©Kaplan) と呼ばれているものに対応する。

(6) **un N** は N が複数あることを意味するか

(f) *J'ai mangé la pomme.*

(g) *J'ai mangé une pomme.*

Dans (f), *la* indique qu'on vise la totalité des objets qui, dans une situation de discours donnée, correspondent à la définition du nom *pomme*. Comme le GN est au singulier, on peut en conclure qu'il n'y a qu'un seul objet de ce type. Au singulier, *le* défini pose donc l'**unicité** du référent du GN dans une situation donnée.

L'indéfini, par contre, ne donne aucune indication sur la présence ou l'absence, dans la situation de discours, d'autres objets de la catégorie référentielle du nom qu'il introduit.

(h) *J'ai mangé une pomme qui restait. Ensuite, j'en ai mangé une autre.*

(i) *J'ai mangé une pomme qui restait. C'était la dernière : il n'y en a plus pour toi.*

(j) **J'ai mangé la pomme qui restait. Ensuite, j'en ai mangé une autre.*

On trouve souvent dans les grammaires ou les articles de linguistique sur cette question une formulation discutable de la différence qui vient d'être mise en évidence : à l'inverse de *le*, qui désigne le tout, *un* désignerait la partie, et impliquerait donc l'existence dans la situation de plusieurs objets de la même catégorie. *Un* marquerait le prélèvement d'un élément dans un ensemble.

On voit déjà que (i) est un contre-exemple à cette hypothèse, puisque cet énoncé montre que *un* est parfaitement compatible avec une situation où il n'y a qu'un seul objet de la catégorie 'pomme'.
(Gary-Pieur, *op. cit.*)

(f) 私はそのリンゴを食べた。

(g) 私はリンゴを1つ食べた。

(f) では **la** は、ある談話状況に存在し「リンゴ」という名詞の定義に合致する事物のすべてを指す。名詞句は単数形なので、その事物は1つしかないと結論できる。したがって単数では **le** はある談話状況における名詞句の指示対象の「唯一性」を表すのである。

これにたいして不定冠詞は、談話状況にその名詞と同じカテゴリーに属する他の事物があるかないかについては、何も示さない。

(h) 私は残っていたリンゴを1つ食べた。それからもう1つ食べた。

(i) 私は残っていたリンゴを1つ食べた。それは最後の1つだった。だから君の分はもうない。

(j) *私は残っていたそのリンゴを食べた。それからもう1つ食べた。

文法書や言語学の論文で、今明らかにした [定と不定の] ちがいについて疑わしい記述を見かけることがある。その場にある全部を表す **le** とはちがって、**un** は部分を表し、その場と同じカテゴリーに属する他の事物が存在することを含意するというのである。**un** は集合から

の抜き出しを表すと主張されているのである。

しかし例 (i)がこのような主張に対する反例となっていることはすぐわかる。この文は「リンゴ」のカテゴリーに属する事物が1つしかない状況でも **un** が問題なく使えることを示しているからである。

【考察】

Gary-Prieur の言っていることは正しいだろうか。いくつかの点で疑問が残る。

① **un** N が談話状況に N に属する他の成員があるという主張と、**un** は *le prélèvement d'un élément dans un ensemble* 「集合からの抜き出し」を表すという主張を同じものとして、それを否定しているのはまちがっている。

un が集合からの抜き出しを表すというのは、古川が正しく指摘している次のような意味である。

Tout d'abord, il faut remarquer que la forme *un N* présuppose logiquement la forme *les N* ; ceci, parce que la forme *un N* qui est une unité relevant de l'ordre du discontinu et s'obtient donc par l'opération de division, exige qu'au préalable il existe un ensemble divisible ; en effet, cet ensemble divisible est justement la forme *les N*.

Considérons ici les exemples suivants :

(31) John veut épouser *une sorcière*, mais ni lui ni moi ne croyons qu'*elles* existent*.

*L'exemple est de Heringer, J. T., « Indefinie noun phrases and referential opacity », *CLS* 5, 1969.

(Furukawa, Naoyo, *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho, 1986)

まず **un** N は論理的に **les** N を前提とすることに注意しよう。なぜなら **un** N は非連続の領域に属する単位であり、分割操作によって得られるもので、あらかじめ分割可能な集合が存在することを必要とするからである。実際、この分割できる集合はまさに **les** N が表すものなのである。

次の例を見てみよう。

(31) ジョンは魔女と結婚したいと思っているが、彼も私も魔女が実在するとは信じていない。

例(31)で先行詞は単数の *une sorcière* なのに、照応詞に *elles* を用いることができるのは、*une sorcière* が『*les sorcières*』という前提集合からの抜き出し (*prélèvement / extraction*) を表しているからである。「一人の魔女」と言えるためには、この世に複数の成員から成る魔女の集合が想定できなくてはならない。したがって *elles* の先行詞は *une sorcière* が前提とする総称の集合としての *les sorcières* である。

このとき注意しなくてはならないのは、文が問題としている談話空間に複数の魔女がいる必要があると言っているのではないということである。(31)を次のように変えてみる。

(31)' John prétend qu'il a rencontré *une sorcière* hier dans le jardin public, mais ni moi ni toi ne croyons pas qu'*elles* existent.

ジョンは昨日公園で魔女と出会ったと主張しているが、私も君も魔女が実在するとは信じていない。

この文はジョンが魔女と出会った昨日の公園という場面 (=談話空間) に魔女が複数いたことを意味するのではない。そうではなく、不定単数の *une sorcière* が使えるには、一部の民間信仰において魔女の集合『*les sorcières*』の存在が前提されていなくてはならないということである。Gary-Prieur はこの二つを混同している。

② Gary-Prieur が挙げている (i) *J'ai mangé une pomme qui restait. C'était la dernière : il n'y en a plus pour toi.* は本当に反例になっているか。

Gary-Prieur は (i) では残っていたリンゴは1つしかないのに *une pomme* が使われている。だから *un N* の使用は *N* が複数個あることを必要としないと主張している。しかし Gary-Prieur は談話の理解における**前提の重要性**を考慮に入れていない。

(i) で残っていたリンゴが1つしかなかったことがわかるのは *C'était la dernière.* という発話のおかげである。それより以前にその場にあったリンゴの個数に関する前提は存在しない。だからこの例を論拠として、*un N* の使用は *N* が複数個あることを必要としないと主張するのは誤りである。

③ 例 (i) のように何の前提もない発話は日常生活ではありえない。私たちは様々な前提に囲まれて暮らしている。そのことが考慮されていない。

例えば次のような例を考えてみよう。

a. [文房具店で] *Je voudrais un stylo à bille.* ボールペンが欲しいのですが。
この場合、文房具店にはボールペンが複数売られていることが前提となる。

b. *Lors des derniers examens, un étudiant a triché.*

この前の試験の時に一人の学生がカンニングした。
この文では試験を受ける学生は大勢いることが前提となっている。

c. [自動車修理工場で工員が助手に]

Passe-moi un tournevis, s'il te plaît. ドライバーを取ってくれ。
修理工場ならドライバーはたくさんあるので、「どれでもいいから」(*non spécifique*) を意味する不定冠詞を用いる。ところが次のように状況を変えると定冠詞が必要になる。

c. [机の上に定規と金鋸とドライバーが1つずつ置いてある]

Passe-moi { le / ??un } tournevis, s'il te plaît.

その場に *N* の指示対象が1つしかなく、その唯一性が前提されているとき (= 話し手も聞き手もそれを知っているとき)、定冠詞が用いられる。この対偶を取ると、定冠詞が用いられない (= 不定冠詞が用いられる) のは、指示対象の唯一性が前提されていないときである。それには2つのケースが考えられる。

1つは上の例 a.~c.のように、指示対象が複数あることが前提とされている場合である。Gary-Prieur が言う「その場に同じカテゴリーに属する他の事物が存在することを含意する」というのはこのケースを指している。逆に村に警察官が1人しかいないことをみんな知っている (= 唯一性が前提されている) とき、*Appelons un agent de police.* 「お巡りさんを (1人) 呼ぼう」とは言わない。

不定冠詞が用いられるもう1つの場合は、指示対象がいくつあるのかについて何の前提もないときである。Gary-Prieur が挙げる *J'ai mangé une pomme qui restait.* はこのケースに当たる。文脈がないのでフルーツバスケットに残っているリンゴがいくつかわからない。したがってこのような場合だけを根拠として、「不定冠詞の使用は、同じカテゴリーに属する他の事物が存在することを含意する」という主張をまちがいだとするのは誤りである。

(7) Gary-Prieur は定冠詞に次の定義を与えている。

Définition

Le donne l'instruction d'identifier un objet de la catégorie N dont l'existence est présumée, et d'envisager la totalité (/unicité) de cet objet dans la situation. (*op. cit.*)

定冠詞 *le* は、N のカテゴリーに属する事物でその存在が前提されているものを同定せよという指令を伝達する。同時にその状況において N が指す事物のすべて（単数のときは唯一のそれ）と捉えるように伝達する。

【解説】

Gary-Prieur の定冠詞の定義には 2 つの条項が含まれている。

(i) 存在が前提されている事物を指す。(*présupposition existentielle*)

(ii) 複数のとき *les N* で指されている事物の全体（すべて）を指す。単数のとき *le N* で指される事物は唯一である

(ii) の前半は「包括性」(英 *inclusiveness*) 仮説 (*cf. Hawkins*)、後半は「唯一性」(英 *uniqueness*) 仮説と一般に呼ばれている。包括性とは、*les N* はその場にある N に該当するものすべてを指すということである。

a. *J'ai lu des œuvres de Flaubert dans cette bibliothèque.*

私はこの図書館にあるフロベールの作品を（いくつか）読んだ。

b. *J'ai lu les œuvres de Flaubert dans cette bibliothèque.*

私はこの図書館にあるフロベールの作品を（全部）読んだ。

詳しく見るとこの定義にもいくつか問題がある。

(8) *les N* がその場にある N のすべてを指すとは限らない例がある。

c. [国会議員選挙があり左派が勝利を収めた]

Cette fois-ci, les Français ont voté à gauche.

今回はフランス国民は左派に投票した。

この場合、フランス人の有権者の全員が左派に投票しなくても、50%を少し越える人が左派に投票するだけでこの命題は真である。このように *les N* の表す全体はゆるいもので厳密なものではない。

d. *Les Américains ont marché sur la lune.*

アメリカ人は月面を歩いた。

e. *Les Chinois ont inventé le papier et la poudre.*

中国人は紙と火薬を発明した。

月面を歩いたアメリカ人の宇宙飛行士は数名しかいない。紙を発明したのは蔡倫と伝えられているし、火薬を発明したのも特定の中国人である。このような場合、1 人の行なった偉業が民族全体の名誉・功績として拡張解釈されるしくみがある。

(9) Gary-Prieur の定冠詞の定義の問題は、次の点が欠けていることにある。

le N が指す指示対象の存在がその談話空間において前提されているだけでは十分ではない。*le N* が指す指示対象が存在する場面・分脈・状況が、聞き手にとって既知の、あるいは容易にアクセスできる関係の枠組み (*cadre relationnel*) でなくては定冠詞は使えない。

このことをはっきりと述べているのは次の文献である。

... en étant combiné à un nom N, l'article défini repère son référent comme étant le seul qui réponde au contenu nominal «N» et il peut aussi conduire à activer *un cadre relationnel* au sein duquel ce repérage univoque peut s'effectuer.

(Carlier, Anne, « La genèse de l'article *un* », *Langue française* 130, 2001)

名詞 N と組み合わせて用いられるとき、定冠詞は N の語彙内容に合致する唯一の指示対象を指す。そして定冠詞は同時に、この唯一の指示対象が定位される **関係の枠組み** を活性化することがある。(強調は引用者による)

(10) 上の引用中の *cadre relationnel* という用語は次の文献から取られている。

A notre avis, l'examen comparé des exemples produits mène en effet à constater la solidarité inextricable de la thèse de l'unicité existentielle presupposée et de la notoriété dans un cadre familial, l'une ne pouvant être fondée qu'à l'aide de l'autre. (...)

(1) {#Cet / L'arbitre } donne le coup d'envoi.

(6) {#Le / Ce singe } te regarde d'un drôle d'œil.

(7) {#La / Cette pomme } est magnifique.

(Tasmowski, Liliane, "Les démonstratifs français et roumains dans la phrase et dans le texte", *Langages* 97, 1990)

私の考えでは、様々な例を比較検討してわかるのは、[定冠詞は] 唯一存在する指示対象を表すという主張と、そうではなく、[定冠詞は] 既知の枠組みにおける周知性を表すという主張とが、分かちがたく結びついていて、一方は他方の助けなくして成り立たないということである。

(1) {#その審判は / 審判は}キックオフを宣言した。

(6) {#サルが / そのサルが} 君を妙な目付きで見ているよ。

(7) {#リンゴは / そのリンゴは} 見事だ。

【解説】

定冠詞 **le N** の意味機能についての主な仮説は次の 3 つである。

① 唯一性仮説 (英 *uniqueness* / 仏 *unicité*)

le N はその談話空間において唯一存在する指示対象を指す。

② 周知性 (親近性) 仮説 (英 *familiarity* / 仏 *notoriété*)

le N は話し手も聞き手も知っている指示対象を指す。

③ 卓立性仮説 (英 *saliency* / 仏 *saillance*)

le N は発話現場や先行文脈において卓立している (*salient*) な指示対象を指す。

Tasmowski はこのうち①と②はどちらも正しく、両者は分かちがたく絡み合っているとされている。例 (1) はサッカーの試合の開始場面だが、「サッカーの試合」という誰もが知っている *cadre relationnel* があるとき **le N** は適格で **ce N** は使えない。例 (6) は初めて訪れる町の広場にバオバブの木があり、枝にサルが一匹いるという場面である。「広場にあるバオバブの木」は話し手・聞き手にとって馴染みのある *cadre relationnel* ではない。このときは **ce N** を用いて発話の場から直接指すしかない。例 (7) も目の前にリンゴが 1 つしかなく、唯一性が保証されていても **le N** が使えない例である。発話の場だけでは十分な *cadre relationnel* にはならず、眼前の発話の場がなんらかの関係のわく組みを形成していなくてはならない。それがないと **le N** は使うことができず、**ce N** によって話し手が直接的に指すことが必要になる。

(11) D'après ce qui a été exposé, que ce soit en situation immédiate ou en reprise textuelle, la différence entre *le N* et *ce N* doit s'articuler en français à l'aide d'au moins les traits suivants :

présupposition de l'existence d'un référent unique saisi indirectement dans un cadre relationnel référent catégorisé	vs	affirmation de l'existence d'un référent à unicité donnée saisi directement ; absence de cadre. N catégorisant	(Ibid.)
---	----	---	---------

今までに述べたことに従えば、現場指示であろうとテキスト内の照応であろうと、**le N** と **ce N** のちがいはフランス語においては、少なくとも次の素性に基づいて捉えられると考えなくてはならない。

唯一の指示対象の 存在が前提されている 関係の枠組みの中で 間接的に捉えられる カテゴリー化された対象	唯一の指示対象の 存在が言明される 直接的に捉えられ わく組みはない N でカテゴリー化する
---	--

【解説】

le N による指示は、N の唯一の指示対象の存在が前提されているだけでは十分ではない。**le N** の指示対象が、話し手・聞き手にとってよく知られている、あるいは容易にアクセスできる「関係の枠組み」(*cadre relationnel*) の中に置かれている必要がある。一方、**ce N** は発話の場からの指差しなどを伴う直接指示なので、そのようなわく組を必要としない。

このことを最もよく示しているのは連想照応である。

i) Nous avons acheté une maison, mais malheureusement, { *le toit* / **ce toit* } était en mauvais état.

私たちは家を買ったが、残念なことに {屋根は /*その屋根は} 状態が悪かった。この場合は「購入した家」が *cadre relationnel* として働く。したがって *le toit* は購入したその家の屋根を指し、関係のわく組みの中に含まれる。

(12) **le N** による指示には、唯一存在する指示対象という前提だけではなく、話し手・聞き手にとって馴染みのある *cadre relationnel* が必要だということを示すもう 1 つの現象を見てみよう。それは隠喩と直喩の冠詞のちがいである。

直喩では不定冠詞が用いられる。

- a. léger comme *une* plume 羽根のように軽い
- b. muet comme *une* carpe 鯉のように無口である
- c. être comme *une* pierre 石のように黙りこくっている / 平然としている
- d. être heureux comme *un* poisson dans l'eau 水を得た魚のようだ (生き生きとしている)
- e. ressembler à qn. comme *un* frère 兄弟のようによく似ている

非可算名詞では部分冠詞を用いることが多い。

- f. être clair comme *de* l'eau de rocher 一見して明らかである
(←岩清水のように澄んでいる)

次のように数詞を使うこともある。

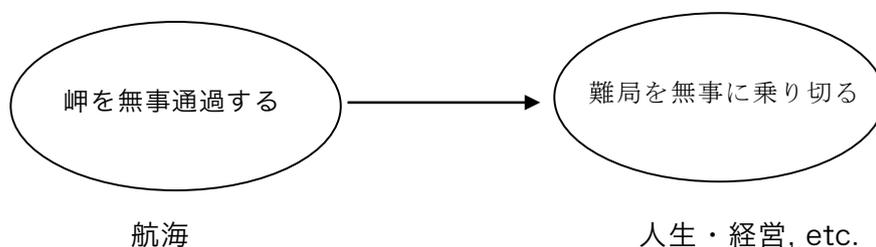
- g. être haut comme *trois* pommes 背丈が低い (←リンゴ 3 つの高さしかない)
- h. se ressembler comme *deux* gouttes d'eau うり二つである

(←二滴の水滴のように似ている)

これに対して隠喩で用いられるのはもっぱら定冠詞である。

- i. franchir / tourner *le cap* 危機を乗り切る (←岬を通過する)
- j. jeter / relever *le gant* 決闘を申し込む / 受けて立つ (←手袋を投げる / 拾う)
- k. porter *le drapeau* 先頭に立つ、リーダーとなる (←旗を持つ)
- l. prendre *la plume* 筆を執る、執筆する
- m. poser *la plume* 筆を擱く、書き終わる
- n. brouiller *les cartes* 話をややこしくする (←カードをかき混ぜる)
- o. tenir *le gouvernail* リーダーとして振る舞う (←船の舵を取る)
- p. croquer *la pomme* 誘惑に屈する (←リンゴをかじる)

その理由は隠喩にはその背景となる場面や物語があるからである。i.は船の航海で難所の岬を無事に通過する場面が下敷きにある。隠喩 (métaphore) のしくみは異なる領域間のマッピングである。



このとき元の領域には、船・船員・海・帆など多くの要素が集まって1つの *cadre relationnel* を形成している。*le cap* はただの岬ではなく、船に乗って航海しているその前に立ちはだかる岬である。

porter le drapeau は戦争の場面を下敷きにしている。*le drapeau* は軍旗であり、軍旗を持つ旗手は部隊の先頭に立って兵士の士気を鼓舞する。したがって *le drapeau* はただの旗ではなく、その部隊の軍旗である。

これを見ても *le N* を使うためには、*le N* の指示対象がよく知られている場面や物語が織りなす関係の網の目の中で捉えられなくてはならないことがわかる。

(13) 小説の文章ではたとえ冒頭であっても既に物語の世界は設定済みであり、作者が組み立てた関係のわく組み (*cadre relationnel*) は作り上げられている。したがってそこに登場する *le N* は原則としてすべて小説に描かれた場面という関係のわく組みの中で把握される指示対象である。

Elle ouvrit *les yeux*. Un vent brusque, décidé, s'était introduit dans *la chambre*. Il transformait *le rideau* en voile, faisait se pencher *les fleurs* dans leur grand vase, à terre, et s'attaquait à présent à son sommeil. C'était un vent de printemps, le premier : il sentait *les bois*, *les forêts*, *la terre*, il avait traversé impunément *les faubourgs de Paris*, *les rues gavées d'essence* et il arrivait léger, fanfaron, à l'aube, dans sa chambre pour lui signaler, avant même qu'elle ne reprît conscience, le plaisir de vivre. (Françoise Sagan, *La chamade*)

彼女は目を開けた。突然、一陣の風が意を決したように部屋に吹き込んで来たのだ。風はカーテンを船の帆に変え、大きな花瓶に生けてある花を床に届かんばかりにたわめ、今や彼

女の眠りに襲いかかっていた。それは今年最初の春の風だった。その風には森と林と土の匂いがした。風は咎められることもなくパリの市街を抜け、ガソリンの匂いのする街角を通過して、軽やかに勝ち誇ったように明け方に彼女の部屋までやって来て、彼女がまだ目覚めないうちに生きる喜びを告げに来たのだった。

(14) 最後に「関係のわく組み」(cadre relationnel) に基づいて指示を行なう定冠詞の特性をよく分析した論文から引用しておこう。

- (1) a. Towards evening we came to **the bank** of a river. (Christophersen 1939)
- b. The boy scribbled on **the living-room wall**. (Du Bois 1980)
- c. Swich **the light** on. (Löbner 1985)
- (2) a. No problem, I'll get **the maid** to do it.
- b. Waiter, I demand to see **the menu**.
- c. I read it in **the paper** this morning.

My principal claim is that each of these NPs refers to a salient role within a frame. The role itself is uniquely identifiable since the frame to which it belongs is part of the general background knowledge shared by all members of the speech community. The uniqueness requirement on use of the definite article is therefore met in these NPs.

- (8) So we lost the Rams and Raiders. Lost our innocence. But hold **the flowers**. Put away **the handkerchiefs**. Stop **the sobbing**. We still have the Rose Bowl, don't we?
(Epstein, Richard, "Roles and non-unique definites", *Proceedings of the 25th Annual Meeting*, Berkley Linguistic Society, 1999)

- (1) a. 夕方頃に私たちはとある川岸にやって来た。
- b. 男の子は居間の壁に落書きした。
- c. 電灯を着けてくれ。
- (2) a. かまいませんよ。メイドにやってもらいます。
- b. ボーイさん、メニューを見せてもらえますか。
- c. 私はそのことを今朝新聞で読んだ。

私の主な主張は、これらの名詞句はフレームの中の卓立した役割を指しているということである。役割自体は唯一的に同定可能である。役割が属しているフレームは、言語共同体のすべての成員が共有している一般的な知識に含まれているからである。したがってこの名詞句に付く定冠詞の使用条件は満たされていることになる。

- (8) (アメリカンフットボールの) ロサンジェルス・ラムズとラスヴェガス・レイダーズ戦では負けてしまった。我々の無邪気さも消え失せた。しかし花を手にて。ハンカチを捨てるのだ。すすり泣きをやめろ。まだローズ・ボウルがあるじゃないか。

【解説】

(1) では、川には岸が2つあるのに **the bank** と定冠詞を使っている。居間の壁も4つあるのに **the... wall** である。部屋の電灯も1つとは限らない。(2)ではメイドは何人もいて、店のメニューもたくさんある。新聞紙も唯一ではない。これらの例では明らかに唯一ではないものに定冠詞を使っている。これは長らく謎とされてきた。

Epstein はこのような定冠詞は、ほんとうの意味で指示対象を指しているのではなく、認知的フレーム (cognitive frame) の中の役割 (role) を指していると主張している。フレームとは、上に述べた「関係のわく組み」(cadre relationnel) とよく似たものである(厳密に言うと少しちがいがあがあるのだが、ここでは触れない)。「役割」はメンタル・スペース理論の概念で、いろいろな人・物がそこに坐ることができる席のようなものである。例えばある野球チームの「四番バッター」がそれで、たとえ選手が交代してもその人はそのチーム四番バッターである。

(8)の「花」「ハンカチ」「すすり泣き」も現実の特定の花やハンカチを指しているのではない。ここではひいきのチームが負けた時にありがちな「関係のわく組み」、つまり嘆き悲しんでいる場面を想定し、その場面に登場するステレオタイプの花やハンカチを指しているのである。

(15) タランティーノ監督の映画『パルプ・フィクション』がカンヌ映画祭で *Palme d'or* を受賞したことを報じるニューヨークタイムズ誌の記事。

Like sex, crime can be brief and messy: more about buildup and aftermath than event and arrival. So **the gun** is fired, **the police officer** dies, and **the diamonds** are stolen. So what happened afterward and how did the relevant players get there, in what kind of car, and did they wear clean underwear?

(Epstein, Richard, "Roles, frames and definiteness", Hoek, van K. et als. (eds) *Discourse Studies in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, 1999)

(映画で描かれる) 犯罪はセックスと同様手短かで乱雑なことがある。(犯罪映画でもっと描いてほしいのは) 事件そのものよりも、犯罪の準備段階と事件の後の出来事だ。(通常の犯罪映画では) 銃が発射され、警官が死に、ダイヤモンドが奪われる。しかしその事件の後に何が起きたのか、犯人たちはどんな車に乗って現場までやって来たのか、犯人たちは清潔な下着を着ていたのか(などということは描かれることがない)。

【解説】

上の記事では凡庸な映画が描きがちな犯罪の場面が話題になっている。the gun, the police officer, the diamonds はそのようなステレオタイプの映画の犯罪場面という *cadre relationnel* に登場する事物を指していて、現実の銃や警官を指しているのではない。Epstein はこれもまた、フレームに含まれる役割指示だとしている。

(15) 定冠詞の意味機能のまとめ 【茶碗とお盆の論理】

不定名詞句 *un chien* 「犬」や定名詞句 *le principal* 「(中学校の) 校長」のような名詞句が指す指示対象を「茶碗」に喩えらとしよう。お客さんにお茶を出すときはふつう茶碗はお盆に載せて出す。お盆は「関係のわく組み」(*cadre relationnel*) である。

不定名詞句 *un N* の表す茶碗はお盆に載っていない。J'ai vu *un chien* courir à toute vitesse. 「私は犬が全速力で走るのを見た」では、*un chien* は他のどんなものとも関係を結んでいない。それは純粹に「一匹の犬」である。

一方、定名詞句 *le N* が表す茶碗はお盆に載っている。J'ai demandé à *la concierge* où était *le principal*. 「私は管理人に校長先生はどこにいるかとたずねた」ではお盆は「中学校」である。中学校が作る関係のわく組みは、「校舎」「校庭」「教室」「廊下」「教員」「学生食堂」「お掃除のおばさん」などで構成されている。*la concierge* はただの管理人ではなく「中学校の管理人」で、*le principal* は「中学校の校長」である。

定冠詞は「名詞が表す指示対象がお盆に載っている」ことを表す。つまり *le N* の定冠詞は、N の指示対象を前提された関係のわく組み (*cadre relationnel*) の中で捉えよという指示的意味を持っている。

◆冠詞についての参考文献◆

【お奨め】

- [1] Gary-Prieur, Marie-Noëlle, *Les déterminants du français*, Éditions Ophrys, 2011.

※冠詞、所有形容詞、指示形容詞、数量表現などの限定詞をバランス良く解説している。
FLE の学生向けに書かれているのでとてもわかりやすい。

【日本語で読める本】

- [2] 松原秀治『フランス語の冠詞』白水社、1978.

※冠詞論の古典だが、いささか古くなったことは否めない。

- [3] 一川周史『新・冠詞抜きでフランス語はわからない』駿河台出版社、1996.

※豊富な用例に基づいて冠詞を幅広く論じていて実用的だが、残念ながら理論的でない。

- [4] 小田涼『認知と指示 — 定冠詞の意味論』京都大学学術出版会、2012.

- [5] 小田涼『中級フランス語 冠詞の謎を解く』白水社、2019.

【英語の冠詞論】

- [6] 石田秀雄『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店、2002.

- [7] 樋口昌幸『英語の冠詞』開拓社、2009.

- [8] 織田稔『英語冠詞の世界』研究社、2002.

- [9] 久野暉、高見健一『謎解きの英文法 冠詞と名詞』大修館書店、2004.

※以上の 4 冊は英語の冠詞についての本だが、フランス語の冠詞を考える上でも大いに役立つ。英語には部分冠詞がなく、裸複数名詞を使うので、フランス語とかなりちがう部分があることを知るのも大事である。

- [10] 池内正幸『名詞句の限定表現』（新英文法選書第 6 巻）大修館書店、1985.

※多少古いが、冠詞の用法の伝統的分類をよくまとめている。

- [11] グレン・パケット『科学論文の英語用法百科 第 2 編 冠詞用法』京都大学学術出版会、2016.

※日本人の書く英語論文の校訂に長く携わった物理学者が書いた一風変わった冠詞論。日本人の犯しやすい冠詞の誤用例が豊富にある。

- [12] Hawkins, J., *Definiteness and Indefiniteness. A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, 1978.

※代表的な英語の冠詞論で多くの人々が引用する。定冠詞の持つ「包括性」(inclusiveness) つまり指しているものの全部を指すという考えは今日定着している。

【フランス語の冠詞論】

- [13] Guillaume, Gustave, *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Hachette, 1919.

※冠詞論の古典だが、ギョームの psycho-mécanique 「心理力動論」による説明は観念的でわかりにくい。

- [14] Furukawa, Naoyo (古川直世), *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho (フランス図書), 1986.

※冠詞の機能に留まらず、一般に名詞句の指示の問題を広く扱っている点が特徴。

- [15] Corblin, Francis, *Indéfini, défini et démonstratif*, Droz, 1987.

※冠詞と指示形容詞の基本的文献。

[16] Kleiber, Georges, *L'article LE générique. La genericité sur le mode massif*, Droz, 1990.

【冠詞を扱った論文集】

[17] David, Jean & Georges Kleiber (eds), *Déterminants : syntaxe et sémantique* (Recherches linguistiques XI), Klincksieck, 1986.

[18] Kleiber, Georges (ed), *Rencontre(s) avec la genericité* (Recherches linguistiques XII), Klincksieck, 1987.

[19] Bosveld-de Smet, Léonie et als. (eds), *De l'interprétation à la quantification : les indéfinis*, Artois Presses Université, 2000.

[20] Flaux, Nelly et als (eds), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université, 1997.

[21] Danon-Boileau, Laurent et al. (eds), *Faits de langue* No. 4, "L'indéfini", Éditions Ophrys, 1994.

[22] Amiot, David et als. (eds), *Le syntagme nominal : syntaxe et sémantique*, Artois Presses Université, 2001.

【雑誌の冠詞・限定詞特集号】

[23] *Langages* No. 79, « Générique et genericité », 1985.

[24] *Langages* No. 102, « Absence de déterminant et déterminant zéro », 1991.

[25] *Langages* No. 151, « Indéfinis, définis et expressions de la partition », 2003.

[26] *Langue française* No. 72, « Déterminants et détermination », 1986.

[27] *Langue française* No. 116, « Indéfinis et référence », 1997.

【論文集に収録された論文】

[28] 小石悟「部分冠詞について」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語学の諸問題』三修社、1985.

[29] 中尾和美「冠詞から見たコピュラ文と同格」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える — フランス語学の諸問題 II』三修社、1998.

[30] 林迪義「定冠詞の使用と名詞指示物の唯一性」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる — フランス語学の諸問題 IV』三修社、2013.

[31] 川島浩一郎「定冠詞の諸用法の成立基盤 — 構文の多様性と間接目的の属詞」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる — フランス語学の諸問題 IV』三修社、2013.

[32] 古川直世「フランス語における定冠詞の内包指示用法について」木下教授喜寿記念論文集編集委員会編『フランス語学研究の現在』白水社、2005.

[33] 坂原茂「フランス語コピュラ文の解釈と属詞の冠詞の有無」、坂原茂編『フランス語学研究の最前線 1』ひつじ書房、2012.

[34] 井元秀剛「定冠詞と範列 (paradigme)」、坂原茂編『フランス語学研究の最前線 1』ひつじ書房、2012.

[35] 小田涼「先行詞のない定名詞句の唯一性」、坂原茂編『フランス語学研究の最前線 1』ひつじ書房、2012.

- [36] 西村香奈絵「不定名詞句主語をもつ否定文」、坂原茂編『フランス語学研究の最前線1』ひつじ書房、2012.
- [37] 東郷雄二「フランス語の不定名詞句転位構文」、東郷雄二・春木仁孝編『フランス語学研究の最前線4』ひつじ書房、2016.

【雑誌論文】

- [38] 藤田知子「un N « générique » について」『フランス語学研究』No. 19, 1985.
- [39] 藤田知子「Vous êtes théâtre ou cinéma ? 構文に関する覚え書き」『神田外語大学紀要』No. 24, 2012.
- [40] Furukawa Naoyo (古川直世)「Article zéro ou absence d'article ?」『フランス語学研究』No. 12, 1978.
- [41] 古川直世「ゼロ冠詞について」『フランス語学研究』No. 18, 1984.
- [42] 古川直世「属詞の位置における複合定名詞句の指示性について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学文芸・言語学系) No. 14, 1988.
- [43] Furukawa, Naoyo (古川直世), “L'article défini et le problème de l'unicité : quantité ou qualité ?”, 『フランス語学研究』No. 44, 2010.
- [44] 古川直世「総称の le N をめぐると論争について」『Stella』No. 9, 1991.
- [45] Furukawa, Naoyo (古川直世), “Les Glaneuses de Millet : employ intensionnel de LE(S)”, *Revue de sémantique et de pragmatique* 2, 1997.
- [46] Furukawa, Naoyo (古川直世), “Cet objet curieux qu'on « appelle » l'article : emploi de l'article défini dans des environnements métalinguistiques”, *La Ligne claire. De la linguistique à la grammaire*, Duculot, 1998.
- [47] Furukawa, Naoyo (古川直世) & Keiichi Naganuma (長沼圭一), “A propos de l'emploi « quasi-intentionnel » de l'article défini : la copie du dessin et a copy of the drawing”, *Acte du XXII^e Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes*, Niemeyer, 2000.
- [48] 大久保伸子「冠詞機能の一元的解釈の試み」『フランス語学研究』No. 9, 1975.
- [49] 大久保伸子「範疇的表現における冠詞の問題」『茨城大学教養部紀要』No. 15, 1983.
- [50] 青木三郎「J. Cl. Anscombe のゼロ冠詞論 — その解釈と再解釈」『フランス語学研究』No. 22, 1988.
- [51] 長沼圭一「複合定名詞句における定冠詞の内包指示の用法について」『フランス語学研究』No. 32, 1998.
- [52] 長沼圭一「定名詞句の解釈をめぐって」(誌上討論)『フランス語学研究』No. 35, 2001.
- [53] 長沼圭一「接続詞的に解釈される無冠詞名詞について」『フランス語学研究』No. 34, 2000.
- [54] 長沼圭一「固有名詞における限定詞の内包付与について」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) No. 73, 1998.
- [55] 長沼圭一「役割記述機能を持つ無冠詞名詞について」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) No. 83, 2003.
- [56] 小田涼「認知フレームによる定名詞句の唯一性」『フランス語学研究』No. 39, 2005.

- [57] 小田涼「定名詞句 *le N* と指示形容詞句 *ce N* による照応のメカニズム」『フランス語学研究』No. 42, 2008.
- [58] 小田涼「定名詞句のいわゆる直示的用法について」『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）No. 90, 2007.
- [59] 小田涼「フランス語の属格をともなう定名詞句の唯一性について」『日本言語学会第 131 回大会予稿集』、2005.
- [60] 小田涼「*La fille d'un fermier* 型の複合名詞句について — フレーム指示としての定冠詞」『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）No. 88, 2006.
- [61] 小田涼「*« La touche d'un piano »* 型または *« l'aile de l'avion »* 型の定名詞句の唯一性について」『年報・フランス研究』（関西学院大学フランス語フランス文学専修）、No. 40, 2006.
- [62] 大久保朝憲「目的語無冠詞名詞のスキーマ」『フランス語学研究』No. 29, 1995.
- [63] 大久保朝憲「フランス語の無冠詞表現 — 名詞の認識と冠詞の相関」『大阪大学言語文化学』No. 3, 1994.
- [64] 東郷雄二「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』No. 35, 2001.
- [65] 東郷雄二「長沼氏への反論」（誌上討論）『フランス語学研究』No. 35, 2001.
- [66] 東郷雄二「Y. Kawabata, auteur de *« Kyoto »* ou Y. Kawabata, l'auteur de *« Kyoto »*」『フランス語学研究』No. 25, 1991.
- [67] 東郷雄二「不定名詞句の転位と状況解釈」『フランス語学研究』No. 40, 2006.
- [68] 東郷雄二「冠詞は何を表しているか — 意味論と語用論のはざままで」『エネルギー』（ドイツ文法理論研究会）No. 31, 2006.
- [69] 東郷雄二「定名詞句の『現場指示的用法』について」『京都大学総合人間学部紀要』No. 8, 2001.
- [70] 東郷雄二「フランス語の不定名詞句と総称解釈」『京都大学総合人間学部紀要』No. 9, 2002.
- [71] 森香奈絵、東郷雄二「フランス語の不定名詞句主語」『人間・環境学』（京都大学大学院人間・環境学研究科紀要）No. 13, 2004.
- [72] 森香奈絵、東郷雄二「*des N* 主語を持つ総称文と状況量化」『フランス語学研究』No. 38, 2004.
- [73] 中尾和美「同格における冠詞について」『フランス語学研究』No. 30, 1996.
- [74] 高垣由美「*il y a* の後の無冠詞名詞」『独仏文学』（山口大学文学部）No. 16, 1994.
- [75] 長沼剛史「指示形容詞句の総称解釈をめぐって」『フランス語学研究』No. 53, 2019.
- [76] Fujimura, Itsuko (藤村逸子), Mutsumi, Uchida, Hiroshi, Nakao, “*De vs. des devant les noms précédés d'épithète en français : le problème de petit*”, Gérald Prunelle et als. (eds) *Le Poids des mots I*, Presse Universitaire de Louvain, 2004.